

42426

教科書文庫

4
810
42-1938
20000
42076

200030
2777

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

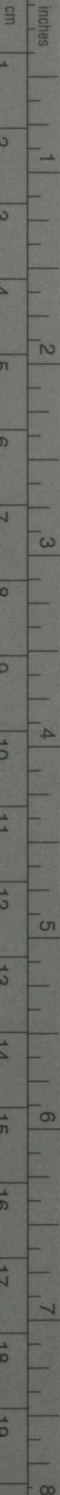


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
5a19
資料室

新制
新撰女子國語讀本

四年制用

卷七



昭和十一年一月二十四日
文部省檢定
高等女子學校國語科用書

資料室

375.9
5219

文學博士 佐佐木信綱 編
文學博士 武田祐吉

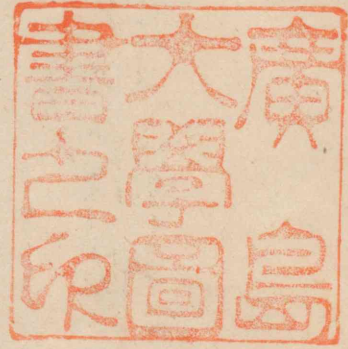
新撰女子國語讀本
四年制用

湯川弘文社



筆 敏 長 原 柳

(圖分部) 言 兼 盛 重



持て右側木をたふす
 不才九月朝十時午
 後讀にあらむのたふす
 女・木がたふすたふす
 心あつてたふす

新制
新撰女子國語讀本
 卷七

目次

一	國體の明光	三上 參次	一
二	吉野の行宮	〔神皇正統記〕	八
三	妹に與ふ	吉田 松陰	一三
四	文苑詞華	横山 桂子	二二
一	春の夜に蛙を聞く	太田垣 蓮月	二三
二	自傳		二三

目次

一

三	心づくし	税所敦子	二五
五	おらが春		二八
一	をさな子		二八
二	雀の子		三二
六	百蟲譜	〔鶉衣〕	三四
七	月の夜	樋口一葉	三九
八	處世の道	夏目漱石	四二
九	熊野落	〔太平記〕	四五
一〇	自然美の心象	吉江喬松	五二
一一	岩室		五七
一二	草山の月		六〇

一三	重盛の諫言	〔平家物語〕	六四
一四	平家の末路	高山樗牛	七四
一	清盛		七四
二	都落		七八
一五	源信僧都の母	〔今昔物語集〕	八〇
一六	去年のしをり		八六
一七	落花の雪	〔太平記〕	八九
一八	配所の月	〔大鏡〕	九四
一九	長柄堤の訣別	坪内逍遙	一〇一
二〇	道義の氣魄	平泉澄	一一一
二一	海外發展の要諦	後藤新平	一二七

二三 天 明 調
 二三 世界の四聖
 二四 茶 味

高山樗牛 一二六
 奥田正造 一四二

〔自修文〕

一 雀の生活
 二 鐘の音

北原白秋 一五四
 西條八十 一六三

附録

宮殿・装束・乘輿圖



新撰女子國語讀本 卷七

一 國體の明光

（月の雲にかくれ、又ちうはれ、様子）

我が國民精神は、皇室を本源として涵養せられ、また發育し來つたものである。歴代の天皇は、慈雨の如き御仁徳を國民の上に垂れたまひ、國民は日々これを仰慕し奉つて今日に至つてゐるのである。かの所謂亂世に在つて、畏くも皇室の最も御不如意でいらせられた御時にも、天皇には常に蒼生の身に御心をよせ給ひ、或は悪疫の流行につけ、或は飢饉につけ、深く宸襟を惱まさせられ、朕は民の父母として徳蔽ふこと能はず、と仰せられ、更に世の不祥も朕の不徳のため、と宣ひ、御不如意なる中にも、及ばせ給ふ限りの事を

蒼生
 サウセイ。あを
 ひとぐさ。人民。

後奈良天皇
第百五代の天皇

なし給ひし後奈良天皇の御事蹟の如き、誰か至高至大なる御聖徳に感泣せぬであらうか。

まことに、代々の天皇は徳を樹て給ふこと深く、君徳は率土の兆民に及び、國民は愈忠誠の眞心を捧げ、茲に萬邦無比の國體を生み出すに至つたのである。我が國の皇室と國民との關係は、他國のそれの如く、權力的人爲的また法律的のものではなくて、全く自然的に發生したところの親子關係にあるのである。國民相互の間も、家族的なる情愛に依つて結合せられるに至つたものである。まことに我が國は、人情の自然に基づいて成つた國家であつて、權力や威力や法律を以て作爲せられた國家社會とは、その成立の歴史を異にしてゐるのである。自然には矛盾が存在しない。自然は永遠の原則の上に立つところのものである。人情の自然に出發せる我が國體の永遠に持續せらるべき理由も、こゝに存在するのである。

宋

(西曆九六〇—
一二七九)但し、
一一二七年以後
は南宋。

元

(一二七一—
一三六七)

明

(一三六八—
一六四四)一六四
四年に明朝莊烈
帝滅び、一六六
二年に明の桂王
永曆滅ぶ。

清

(一六一六—
九一一)

のである。

今、試みに是を隣邦支那に比較して見よう。例へば、宋が滅びて元となり、元が滅びて明となり、明が滅びて清となる。是等の場合には、新なる朝廷に盡す者は、前朝の君主に對する反抗的態度となり、前代の朝廷に忠義なるものは、新なる君主に對する反抗的態度を採ると云ふが如き矛盾が生じて來る。それは革命易姓を常とする國に在つては當然の事である。然るに、我が國には、かゝる事柄は絶対に發生せぬのである。我が國にも臣下の間に政權の移動のあつた場合、例へば源平の際などには、是に似た事が無いでもないが、それは國體には全く關係の無い事である。

翻つて考へてみると、如何なる國家であつても、その存立してゐる間は、國運の永久不滅ならむことを願はないものはない。併し事實はその通りに行かぬものが多い。かの羅馬の盛んなる時代

秦の始皇
支那、夏、殷、周
 三代の後をうけ
 て、嬴政天下を
 統一して秦の始
 皇と稱せり
 六國
支那、春秋戰國
 時代の齊、楚、
 燕、韓、魏、趙の
 六國
 隋の文帝
楊堅、隋朝第一
 代の帝、在位五
 八一—六〇四
 隋は三世三十七
 年にして滅ぶ。
 義は乃ち君臣云
 云
隋書に、義乃君
 臣情兼父子と
 あり
 恭帝
こゝは、恭帝伺
 をさす、(在位
 六一八—六一九)
 神勅
 日本書紀に「豐
 葦原千五百秋之
 瑞穗國是吾子孫
 可王之地。宜爾

に在つては、その國民は等しく羅馬の無窮不易を信じたものであつた。けれども、久しからずして北方民族の爲に蹂躪せられ、亡國の悲しみを見た。秦の始皇は六國を滅し、支那全土を統一して自ら始皇帝と號し、二世三世より數へて千萬世に至り、以て帝位を無窮に傳へようとした。けれども僅かに三世にして滅びた。隋の文帝も、その遺詔に「義は乃ち君臣情は父子を兼ねぬ」といつてをるけれども、是も其の孫の恭帝の時に亡びた。近頃の露獨塊等の諸國皆然らざるはない。然るに、我が國に在つては、天照大神の神勅の精神が萬古に互つて存し、時代によつて多少盛衰の差はあつても、常に其の明光を放ちつゝあるといふ事柄こそ、眞に我が國家の、他の國家と相違のある根本點である。私達國民は、よく此の根本的特色を心肝に銘し、我が國體を益光輝あるものにするやう不斷に努力せねばならぬのである。

皇孫就而治焉。
キナ、ノ、コ
 行矣。寶祚之
 ナルコトニニ
 隆當與三天壤
 無窮者矣。
 會澤正志齋
常陸(茨城縣)水
 戸藩の儒員。文
 久三年歿。年八
 十二。(二四四二
 一五二二三)
 藤田東湖
水戸藩士。勤王
 家。安政二年歿。
 年五十。(二四六
 六一二五一五)

水戸の碩學、會澤正志齋は、此の邊の事實を説明して、帝王の持みを以て四海を保ち、久安長治にして天下動搖せざるものは、萬民を畏服せしめ、一世を把持する謂にあらずして、億兆一心、皆其の上を親しんで離るゝに忍びざるの實誠に恃むべきなり。と云ひ、藤田東湖は、上の人は生を好み、民を愛するを以て徳とし、下の人は一意上に奉ずるを以て心とす。と説いてゐるが、いづれも歴代の聖徳と臣民の忠誠とを語を換へて述べてをるのである。君民が一心同體であるところに、眞に我が國體の永久無限なる所以を見出し得るのである。

我が國體の優秀にして、世界萬邦に異彩を放ちつゝあることは、歴史の證明する所である。繰返していへば、我が國體は肇國以來、連綿たる萬世一系の皇統昭乎として君臨せられ、列聖何れも徳高く、君とし親として臣民を愛撫し給ひ、臣民は正心誠意奉公の至情

金甌無缺
キンオウムケ
ツ。

を捧げて忠孝の大道を盡し、君民一致協力して永久に其の美風を維持せむとしつゝあるのである。是れ全く世界の他の諸國に見出し能はぬところであつて、金甌無缺の國體と申すより外ないのである。天照大神の神勅の如く、天壤とともに窮りない皇國の盛運は、これ世界萬國に比類なきところであつて、しかも世界の他國民に誇り得る唯一のものであるとなすことも、決して不當ではない。政治の事、社會の事、萬般の事、皆之を中心とし、之を根幹として、進めらるべきである。教育勅語に、

「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」

と仰せられ、皇祖皇宗は、我が國家が永遠に興隆するやうに宏大なる規模を以て之を肇造し、深厚なる恩徳を國民に施したまひしことを示され、且、

肇造
テウザウ。はじ
めつくること。

「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ是レ我カ國體ノ精華ニシテ」

と仰せらる。億兆の臣民が心を一にして忠孝の美德を勵み、君民その徳を以て一體となれることを以て、我が國體の精華と宣うたのである。我等國民たるものは、この我が國體の優美なる所以を自覺すると共に、其の光榮ある國史をして、更にうるはしきものとして將來に永久に發展せしめねばならぬのである。而して、是れ實に、生を此の國に稟けたる者の當に負ふべき責任である。日本國民としての最大なる光榮であると同時に、最高なる義務である。

(三上參次「日本國體論」)

三上參次
文學博士。國史
學者。東京帝國
大學名譽教授。
帝國學士院會
員。兵庫縣の人。
慶應元年生。

二 吉野の行宮

五月にも成りぬ。尊氏等西國の兇徒を相語らひて、重ねて攻上る。官軍利なくして都に歸參せし程に、同二十七日また山門に臨幸し給ふ。八月に至るまで、たび／＼合戦ありしかど、官軍いと進まず。

十月十日の頃にや、主上山門より還幸。いとあさましかりし事どもなれど、なほ行末を思し召す道ありしにこそ。東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめとして、さるべきつはものも數多仕うまつりけり。

同十二月に、忍びて都を出でましまして、河内の國に正成といひしが一族等を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ふ。もとの如く在位の儀にてぞましましける。内侍所も遷

五月

延元元年（一九九六）足利尊氏太宰府を發し大舉東上し、五月二十五日攝津に至る。この日楠木正成淡川に戦死せり。同二十七日後醍醐天皇延曆寺に幸し給へり。

相語らふ

東宮

恆良親王。後醍醐天皇の皇子。

延元三年（一九九八）薨御年十五。

實世卿

傳未詳。

義貞朝臣

新田氏。延元三年（一九九八）歿。年三十八。

内侍所

奇特

戊寅

延元三年。

顯家卿

北畠氏。北畠親房の長子。延元三年（一九九八）歿。年二十一。

親王

後醍醐天皇の皇子。義貞親王。後の後村上天皇。

石津

大阪府泉北郡濱寺町附近。

苔の下にも云々。金葉和歌集、和泉式部の歌に、「もろともに苔の下には朽ちずして埋もれぬ名を見るぞ悲しき」とあり。

男山

京都府綴喜郡石清水八幡宮のある所。

いふばかりなし。

らせ給ひ、神璽も御身に隨へ給ひけり。誠に奇特の事にこそ侍りしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起す輩も侍りき。臨幸の後には、國々にも御志あるたぐひ數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。またの年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先だて申し、重ねてうち上る。海道の國々を悉く平けて、伊勢伊賀を経て大和に入り、奈良の京になむ著きにける。それよりところ／＼の合戦あまたたび、互に勝負侍りしに、同五月和泉の國石津といふ處にての戦に、時や到らざりけむ、忠孝の道こゝにて極り侍りにき。苔の下にもうづもれぬものとは、たゞいたづらに名をのみぞ留めてし。心憂き世にも侍るかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて、暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退く。北國にありし義貞も、たび／＼召されしかど上りあへず、させる事なくて、空しくなりぬと聞えしかば、いふば

かりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子、また東へ向かはしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣、中將に轉じ、從三位に敘し、陸奥介鎮守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍、悉くかの節度に從ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ふ。「道の程もかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ」となん申されし。異母の御兄も數多ましましき。同母の御兄も、前東宮恆良親王、成良親王ましまししに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、纜を解かれしに、十日餘りの事にや、上總の地近くより空の氣色おどろおどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いとど波風おびたゞしくなりて、數多の船行方知らず侍り

陸奥の皇子
陸奥の太守、義良親王。
顯信
源氏、親房の子。
天授六年(二〇四〇)歿。
節度
セツド。さしづ。
指揮。
儲の君
皇太子の御異稱。

七月の末つ方
延元三年七月二十六日。
啓す
申上ぐ。
おどろ／＼しく
仰山に。

伊勢の海
伊勢の國篠島(愛知縣知多郡)をさす。

内の海
霞が浦。

天位を嗣がせ云
延元四年八月十五日、後醍醐天皇位を義良親王に譲り給へり。
かくれましぬ
延元四年、後醍醐天皇崩御。
寝るがうちなる云々
古今和歌集、壬生忠岑の歌に、「ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつつとは見ず。」とあり。

けるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に著かせ給ふ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風の紛れに、東國をさして常陸の國なる内の海に著きたる船侍りき。方々に漂ひしなかに、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けらる。末の世にはめづらかなる例にぞ侍るべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御すまひもいかゞと覚えしに、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後には吉野に入らせましまして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとど思ひ合はせられて、尊くも侍るかな。また常陸はもとよりこゝろざす方なれば、御志ある輩相はからひて、義兵こはくなりぬ。奥州野州の守も、次の年の春重ねて下向して、各國に就き侍りにき。

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧にをかされさせ給ひて、崩れましましぬとぞ聞えし。寝るがうちなる夢の世、今に始めぬ習

胎中の天皇
第十五代應神天皇

宸襟

北畠親房
吉野朝の忠臣。
正平九年歿。年
六十三。(一九五
二—二〇一四)

ひとは知りながら、かずく、目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへ、滯ほりぬ。かねて時をもさとらしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第へ遷し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰せのまゝにて、後醍醐天皇と申す。昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りましましき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、胎中の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなきぬす人世に起りて、四年餘りが程宸襟を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空しく侍りなむや。今の御門また天照大神より以來このの正統を受けましましぬれば、この御光に争ひ奉るものやはあるべき。なかくかくて鎮まりぬべき時の運とぞ覺え侍る。(北畠親房—神皇正統記)

妹
吉田松陰の長妹
千代子。

この書は安政六年四月十三日、松陰が萩の野山の獄に在りしとき千代子に與へしもの。
洗米
神佛に供ふるあらひ米。
拙者
吉田松陰。

三 妹に與ふ

此の間は御文下され、観音様の御洗米、三日の精進にて頂き候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進・潔齋などは随分心のかたまり候ものにて宜しき事と存候に付、拙者も二月廿五日より三月晦日まで、少々志の候へば、酒肴ども一向食べ申さず候。その間一度靈神様御祭のもの頂戴致し候許りに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にも之なく、御深切の事に候へば、相果し度存候へども、當所にてはあたりまへの精進の外に、又精進と申候うては、連中又は番人ども、何故と怪しみ尋ね候に付、それをそれと相答へ候事、面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に頂き申候。
抑、観音信仰せよとの事は、定めて禍をよけ候爲にあるべく、是に

普門品
フモンボン。觀
世音菩薩普門品
の略。妙法蓮華
經の一部。
人屋
獄屋のこと。
首の座
ちんぢ
山口縣の方言。
微塵の意に同
じ。

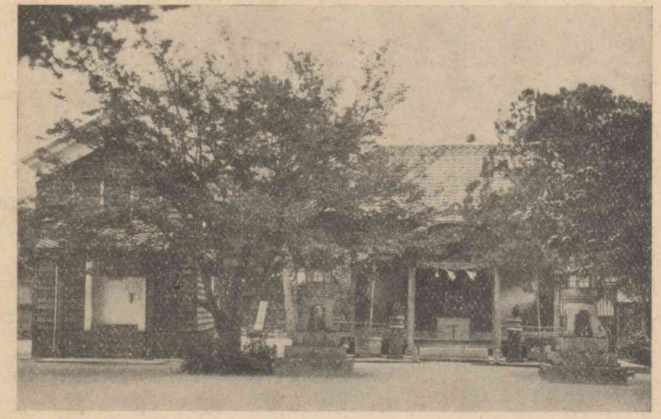
大乘
小乘

は大きに論ある事に候へば、委細申し進ずべく候。法華經第二十
五の卷、普門品と申す篇に、悉く觀音力と申す事高大に述べてこれ
あり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目に懸り候へば忽ちぶつぶ
つと繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠鍵が外れ、首の座へ直り
候へば、忽ち刀がちんぢに折るゝなど申してこれあり候。是は、拙
者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終
この趣に候。それ故、凡人はこれよりあり難き事はなしとて信仰
するも無理はなく候。

さりながら佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乗と二つに分ち
て、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり
候。小乗にて申候へば、觀音は右の經文の通りのものと心得たる
ものに信仰せしむる事に御座候。是は大いに信を起さする爲な
り。信を起すとは、一心にあり難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他

退轉

出世法



松 蔭 神 社

慮なき事にて一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂にな
りだにせば何事に臨み候うても、少
しも頓著なく、繩目も人屋も首の座
も平氣になられ候故、世の中に、難題
苦患の候うても、それに退轉して不
忠不孝無禮無道等仕る氣遣ひはな
し。されど初めより凡夫に、一心不
亂の、不退轉のと申し聞かすとも、少
しも耳に入らぬもの故に、かりに觀
音様をこしらへて人の信を起さす
る教に御座候。これを方便とも申
候。

さて又大乗と申す方にては、出世法と申す事、肝要に御座候。出

三十出山
釋迦年三十にし
て山を出でたる
をいふ。
魂は元なす
（さとりをゆし）
魂は元なす

世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初めは釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならむかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なむかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲みを發し、生老病死が此の世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまざると志を立てて、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さて候うて三十出山とて、僅か五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出で来て、それより世の人を教化せられたり。是が即ち出世法なり。故に出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ち此の世の人を濟度する事に御座候。

さてその死なずと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申す御方

方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば有難がりもし、恐れもするなり。はたして死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經のとほりには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は、刃物に身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。すなはち刀のちんぢに折れたる證據なり。

さてまた「禍福繩の如し」といふ事を御悟りあるが宜しく候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己の爲、人の爲、後の世へも残り、かつく死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば、また如何なる禍の來むも知れ申さず候。勿論その禍の中には、また福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先に

禍福云々
漢書賈誼傳に見ゆ。
人間萬事云々
淮南子人間訓に出づ。
かつく

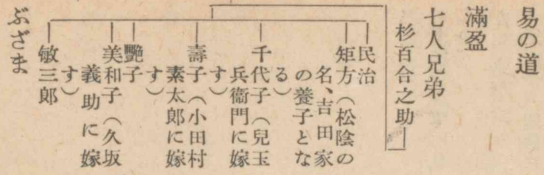
は福あるべし。何の效驗もなき事に、観音に頼みて福を求むるや

うの事は必ずく、無益に存候。

尤も右の通りに申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分と御存じあるべきが、茲にまた論あり。易の道は満盈と申す事を大いに嫌ふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は天折、敏は啞子、ぶざまの悪きやうなものなれど、あと四人は何れもかなりに世に渡られ、特に兄様そもじ小田村は兩人づつも子供あれば、不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見較べよ。これ程



松 下 村 塾



にも参らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にて、高須などにも、兄弟の内には悪しき人も随分あるなり。然れば父母兄弟の代りに、拙者、艶、敏の三人が禍を受くるにこそと思ひ候はば、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。

かつ杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣遣ひなるものに候はずや。拙者身の上は、前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は随分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて何の不足もなき中なれば、子供等がいづもこのやうなるものと思ひて、昔山宅にて父様母様の晝夜御苦勞なされたる事を話し聞かせても、眞とは思はぬ程なれば、この先五十年七十年の事をとくと手を組んで案じ見られよ、氣遣ひなるものにては候はずや。

去年も端午に客の多きを、人はめでたしめでたしと嬉しき顔を

つめ
所詮。

山宅
杉常道隠棲の家。

端午

小太郎
民治の子にして
松陰のためには
甥なり。

すれど、拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬ故、始終稽古場に
屈みて、人の知らぬ處にては獨り落涙したる程の事なりき。若し
や、萬一小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危ふし危
ふし。父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまで
ぞ。小田村にてすら、山宅の事はよく覺えて居るまじ。まして久
坂などは尙以ての事。されば拙者の氣遣ひに觀音様を念ずるよ
りは、兄弟甥姪の間に、樂は苦の種、福は禍の本」と申す事を、篤と申聞
かする方が肝要なり。

尙又一つ、拙者不孝ながら孝に當る事あり。兄弟の内に一人に
てもぶざまの悪しき人あらば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝
行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者
は、兄弟の代りに此の世の禍を受合ふ故、兄弟中は拙者の代りに父
母様へ孝行してくるゝがよし。さすればつゞまるところ、兄弟中

勘辨
考へ辨ふるこ
と。

心學本
心を正しくし、
身を修むること
を説きたる本。

俗簡襟輯
一冊。吉田松陰
の書翰集。久坂
義助の編輯にか
かる。

皆よくなりて、果ては父母様の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、
子孫の爲是程めでたき事はなきにあらずや。よくよく御勘辨候
うて、小田村久坂なんどへも此の文御見せ、佛法信仰はよき事なれ
ど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、折々御見候へかし。心學本
に、

のどけさよねがひなき身の神まうで

神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。

(吉田松陰—俗簡襟輯)

四 文苑詞華

一 春の夜に蛙を聞く

雨の名残の空、しめやかなる霞の中にくれはてて、いひしらずのどかなるに、枕をもとらず燈火のもとに筆まさぐりしなどするほど、庵近きみぞ河に、ほのめき出たるこゑ、いとをかしと耳とゞめられて、水のそこにやなどひとりごたるゝに、やゝ人しづまるほど、何事をかかたらふらむ、たかきあり、ひきゝあり、あるはやりかなる、あるはゆたげなる、おのがさまゝ、聲をつくして鳴きかはしたる、かつはかしましともおぼゆるものから、今やさくらむと遠きさかひをさへ、ふと思ひやられて、

うつりゆくはるの日數を山吹の花にをしとやかはづなく
らむ
(横山桂子)

はやりか
軽くして、物深
からぬさま。お
ちつかぬさま。
今やさくらむ云
云
萬葉集に、蛙鳴
く神奈備川に影
見えて今や咲く
らむ山吹の花。
とあるによる。
横山桂子
女流歌人。安政
二年歿。年五十
六。(二四六〇―
二五一五)

二 自傳

父は因幡の國人太田垣光古みつひまといへり。故ありて都、東山に住み、其の頃寛政三年出生、名誠まこととよぶ。母は早うなくなりて父にはぐくまれて人となる。三十あまりにて夫も子もなくなりて、

つねならぬ世はうきものとみつ栗のひとり残りてものを
こそ思へ

やがて父のもとにありて、四十あまり、父におくれて、
たらちねの親のこひしきあまりにははかにねをのみなき
くらしつゝ

此の近き處にをらばやと思へど、山の上にて人の住むべき處にも
あらねば、なくゝかぐら岡崎に移りぬ。もとより貧しき身にて
せん方なく、土もてきびしよといふ物を造る。いとてづつにてか
たちふつゝ、かなり。歌もただすきにてよむとはすれど、昔より暇

太田垣光古
通稱傳右衛門。
京都知恩院の廣
間侍たり。

きびしよ
急須の託。
てづつ
つたなきこと。
下手。不調法。

なく賤しき身にて、よき大人によりて學ぶ事もえせざりければ、人の口まねにてかたことのみなり。

手すさびのはかなき物をもちいでてうるまの市にたつぞ
わびしき

月前時鳥
一聲はしのひか
ねてやもらすら
んつきもかたふ
く山ほととぎす
八十一歳蓮月

月 一ひきのものもいひ
時 ころもいふもいふもいふも

蓮月筆

命のみ長くて老いゆく程に、世の中騒がしくなりて、

夢の世とおもひすててもむねに手をおきて寝し夜の心地
こそすれ

恐ろしければ北山の邊にしかもといふ處ににげいりて、

露の身をたゞかりそめにおかむとて草ひきむすぶ山の下
かけ

にしかも
今の賀茂。京都
市左京區にあ
り。

はに

猶、長らへて今は八十あまりになりたり。

あけたてばはにもてすさびくれゆけば佛をろがみおもふ
ことなし

夕さり、そらをながめて、

ちりばかり心にかゝる雲もなしいつの夕べか限りなるら
む

時にとし八十四 蓮月

(太田垣蓮月)

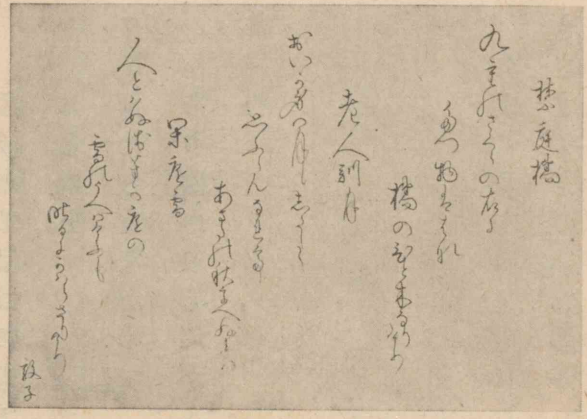
三 心づくし

年月の移りゆくまゝに、ありし事ども思ひ出づれば、嬉しき悲し
き、さまざまのふし多かれど、さしあたりたる其のきはばかりには
覚えぬこそ、いとふかひなきわざなりけれ。こたびはいみじう
悲しき事ども、取集め見盡したれど、幼きものの物の心しるやうに

禁庭橋
九重のさくらの
右にたつ物はは
な橋のひと木な
りけり

老人馴月
おいか身は月も
したしく思ふら
んなれてあまた
の秋をへぬれば
閑庭雪
人とはぬ淺茅が
庭の雪のうへは
けふも昨日にか
はらさりけり

しはぶき
暖。せきばらひ。
かぎりの旅



税所敦子筆

なりなむ頃は、物忘れがちに、あとはかなき心にては、ついでのまゝに、語りきかすべき事ども覺東なう、かつはかげろふの夕べをまたぬ世のならひにて、もし其の程を待ちつけざらましかば、いかなりし事とだに、しらざらむが、罪ふかかりぬべければ、言の葉のつゞきもしらずながら、思ひ出るまゝに、しるしおくなりけり。
年頃頼みし人の、去年の二月はじめつ方より、いさゝか心地惱まして、世の常のしはぶきのやうにはあらざりけれど、かぎりの旅とやは思ひかけたりし。其の程の事書きつゞけむは、いと胸いたう忍びかたければ、くはしうもえしるさでなむ。まいて

税所敦子
歌人。京都の人。
明治三十三年
歿。年七十六。

今はと見はてつるほどのこゝち、何にかはたぐふべき。同じ道にと思ひなげけど、心にかなふわざにしもあらねば、やうくをさめむとするに、髪ばかりをそぎて、そへきこゆるもいとあかずあさましうて、
黒髪にうきみをかふるものならば後の世までも後れざらまし
神佛にも、今ひとたびおこたらせ給へと、祈りたてまつりしも、其のかひなくなりぬれど、さりととも後の世は捨てさせ給はじと、猶頼みたてまつりて、
限りある命を今はいかにせむみちびきたまへのちの世のやみ

(税所敦子)

竹植うる日
陰曆五月十三日

執念
シフネン。

あどなし
あどけなしに同じ。

五 おらが春

一 をさな 子夏こぞま事まことが多おほてうう世よ

こぞの夏竹植うる日のころ、うき節しげき浮世に生れたる娘、おろかにして、ものにさとかれとて、名を「さと」と呼ぶ。

ことし誕生日祝ふころほひより、手うちく、あは、天窓てんまどてんてん、かぶりく、振りながら、同じ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるを、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直ちに外の物に心うつりて、そこらにある茶碗をうちやぶりつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめりくむしるに、「よくした、よくした」とほむれば、まことと思ひ、きやらく」と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらくしく清く見ゆれば、あどなき

逮夜
タイヤ。忌日の前夜。



土蔵の前の一茶 高山山完筆

佛ほとけ優やさ見るやうになかく、心の皺を伸ばしぬ。又、人の來りて、「わんわんは何處に」といへば、犬に指さし、「かあくは」と問へば、鳥に指さ

すさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るゝよりも優しくなん覺え侍る。

このをさな、佛ほとけのもりし給ひけむ、逮夜の夕暮に、持佛堂に蠟燭ろうそくてらして、鈴うち鳴らせば、何處にゐてもいそがはしく這ひよりて、さわらびのちひさき手を合はせて、なんむくと唱ふる聲、しをらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝なり。それにつけても、おのれ頭には幾らの霜をいたゞき、額にはしばし

二十五菩薩
念佛の行者を擁護するといふ二十五の菩薩。

牡鹿の角云々
この句、萬葉集にあり。

ば波の寄せくる齡にて、彌陀たのむすべも知らで、うか／＼月日を費すこそ、二つ子の手前も恥づかしけれと思ふも、その座を退けば、はや地獄の種を蒔いて、膝にむつる、蠅を憎み、膳をめぐる蚊をそしりつゝ、あまつさへ佛の戒めし酒を呑む。
折から門に月さしていと涼しく、外にわらはべの踊の聲すれば、直ちに小椀投げすて、片みざりにみざり出でて、聲をあげ、手眞似して、うれしげなるを見るにつけつゝ、何時しか、かれをも振分髪のためけになして、踊らせて見たらむには、二十五菩薩の管絃よりも遙かにまさりて興あるわざならむと、わが身に積る老を忘れて、憂さをなむ晴らしける。

かく日ねもす、牡鹿の角の束の間も、手足を動かさずといふことなく、遊び疲るゝものから、朝は日のたくるまで眠る。その内ばかり、母は正月と思ひ、飯焚き、そこら掃き片づけて、團扇ひらく、汗

衣のうちの珠
妙法蓮華經に出づ。

露のせは、露のせな
かろ／＼りたかろう

おらが春
一卷。小林一茶の俳文俳句集。

をさまして、閨に泣聲のするを目の覺むる相圖と定め、手がしこく抱き起して、裏の鼻に尿やりて、乳房あてがへば、すは／＼吸ひながら胸板のあたりを打ちたゝきて、にこ／＼笑ひ顔をつくるに、母はなが／＼胎内の苦みも、日々襁褓のけがらしきもほと／＼忘れて、衣のうちの珠を得たるやうに撫でさすりて、ひとしほ悦ぶ有様なりけらし。

蚤のあと數へながらに添乳かな
より／＼思ひよせたる小兒をも、あそびづれにもと此處につどへつ。

柳からももんぐああと出る子かな

小兒の行末を祝して、

たのもしやてんつるてんの初給

(小林一茶—おらが春)

二 雀の子

悠然として山を見る蛙かな
雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

何のその小家も
あつしやかまし
き 一茶

筆茶一

鳴く猫に赤ん目をして手鞠かな
けろりくわんとして鳥と柳かな
母馬が番して飲ます清水かな

けろりくわん

何のその小家も
あつしやかまし
き 一茶

大螢ゆらりくと通りけり
罷り出でたるはこの藪の墓にて候
鶉の眞似は鶉より上手な子どもかな
山寺や縁の上なる鹿の聲
有明や浅間の霧が膳を這ふ
一人と帳面につく夜寒かな
掠鳥と人に呼ばるゝ寒さかな
ずぶぬれの大名を見る炬燵かな
大根引大根で道を教へけり
寒念佛さては貴殿でありしよな

(小林一茶)

掠鳥
ムクドリ。燕雀
類の一種。こゝ
にては田舎者と
云ふ意に用ふ。
寒念佛
寒三十日間、信
者が寒夜の修業
に佛名を唱へな
がら寺まゐりす
ること。

六 百 蟲 譜

莊周が夢も云々
莊子齊物篇に、
莊周が夢に胡蝶
となりて遊びし
事を記せるによ
る。

古今の序に云々

古今和歌集の紀
貫之の序に、花
になく鶯、水に
すむ蛙の聲をき
けば、生きたし
生けるもの、い
づれか歌をよま
ざりける。

古池に云々

芭蕉の句、古池
や蛙とびこむ水
の音。
やがて死ぬ云々
芭蕉の句、やが
て死ぬけしきは
見えず蟬の聲。

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ莊周が夢も、この物には託しけめ。蛙は、古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、このものこと、更にも誇りがたし。蟬は、たゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。や、日ざかりに鳴きささかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ、大いなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

貧の學者云々
晉書の車胤傳に
よる。

歌に螢火云々

ほたるのはは、
火の意にて螢火
とつゞくこと
を中世以後歌道
にて禁ぜしをい
ふ。

退隱の媒

金樓子に見えた
る楚國の龔舍の
故事による。

頼光

源満仲の子。勇
武當時に冠た
り。治安元年(一
六八一)歿。

螢は、比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはこの眞似すべからず。茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならむ。つく／＼ほふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。蜘蛛は、巧に網を結んで、潜まつて物を害せむとす。昔、退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代、朝敵の初めとして、頼光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふる

槐安の都

書言故事に、淳于芬夢に槐安國（蟻穴）の大守となりしことを記せるによる。

千丈の云々
韓非子に、千丈之堤以蟻蟻之穴潰。

歐陽氏

名は修。支那宋時代の文人。古文眞寶後集に、「憎蒼蠅賦」あり。

長嘯子

木下勝俊。字は大藏。若狭小濱の城主。和歌をよくす。慶安二年歿。年八十一。（二二二九—二三〇九）

折もあらむか。彼はかひなくしく巢作りてこそあれ、東海道にちりほひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらむ。蠶の生涯は世の爲に終る。蜉蝣は、はかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。同じ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、黄金蟲はいやし。

蟻は、明暮に忙しく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたより悪しきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は、歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛まる、蚤はたま〜にして、猿の手にさぐらる、虱は逃る、こと難かるべし。

蝸牛は、只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家は持

ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蛇、蚯蚓の足なくとも歩むべくは、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠に乗りて富士を眺めゆく人には似たり。

促織、鈴蟲、轡蟲は、その音の似たるを以て名によばる。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつ

けき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。こ

れ松蟲の類なるべし。きり〜すのつゞり刺せとは、人のために夜寒を教へ、藻に棲む

原

今の静岡縣駿東郡原町。

吉原

同縣富士郡吉原町。

つゞり刺せ云々
古今和歌集、在原棟梁の歌、秋風に結びぬらし、藤袴つゞりさせ、てふきりぎりすなくし。

われから云々
古今和歌集、藤
原直子の歌、あ
まの刈る藻にす
む蟲のわれから
と音をこそな
め世をば怨み
じ。

七賢

晉の嵇康・阮籍・
山濤・向秀・劉
伶・阮咸・王戎の
七人。所謂竹林
の七賢。

横井也有

名は時般。俳人。
尾張侯に仕へし
重臣。天明三年
歿。年八十二。
（二二六二—二
四四三）

蟲は、われからとたゞ身の上をなげくらむを、蓑蟲のちよくと
呼ぶは、父をのみ戀ひて、などかは母をば慕はざらむ。
蚊は憎むべきかぎりながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕
べ、始めてほのかに聞きたる、又は長月の頃、力なく残りたるは、寂し
きかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やり焚く里の烟など、か
つは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の
夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

（横井也有 鶉衣）

蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげにはしる西へ東へ
蝗まろうるさく出でて飛ぶ秋のひより喜び人豆を打つ

（橘 曙覽）

七月の夜

村雲すこし有るもよし、無きもよし。磨きたてたるやうの月の
かげに、尺八の音の聞えたる、上手なら
ばいとをかしかるべし。三味も同じ
こと。琴は西片町あたりの垣根ごし
に聞きたるが、いとよき月に、弾く人の
かげも見まほしく、物がたりめきてゆ
かしかりし。親しき友に別れたる頃
の月、いと慰めがたうもあるかな。千
里の外までと思ひやるに、添ひても行
かれぬものなれば、たゞうらやましう
て、これを假に鏡となしたらば、人のか



横山大観筆

月

西片町
東京市本郷區。

はかなき事

げもうつるべしやなど、はかなき事さへ思ひ出でらる。さゝやかなる庭の池水にゆられて見ゆるかげ、物いふやうにて、手すりめきたる處に寄りて、久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも、次第に底深く、この池の深さいくばくとも測られぬ心地になりて、月はその底の底のいと深くに住むらんものやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見るに、空なる月と水の影と、孰れを眞のかたちとも思はれず。物ぐるほしけれど、箱庭に作りたる石一つ、水の面にそと取落せば、さゝ波少し分れて、これにぞ月のかげ漂ひぬる。斯くはかなき事して見せつれば、甥なる子の小さきが眞似て、姉さまのする事われもすとて、硯の石いつの程に持て出でつらん、我もお月さま碎くのなりとて、はたと捨てつ。それは亡き兄の物なりしを、身に傳へていと大事と思ひたりしに、はかなき事にて失ひつる、罪得がましきことと思ふ。此の池かへさせてなど言へども、未

罪得がましき事

樋口一葉

名は夏子。小説家。東京市の人。明治二十九年歿。年二十五。

ださながらにてなん。明けぬれば、月は空に還りて名残もとゞめぬを、硯はいかさまになりぬらん、夜な夜な影や待ちとるらんとあはれなり。嬉しきは月の夜の客人。つねはうとくしくなどある人の、心安げに訪ひよりたる。歌よみがましきは憎きものなれど、かゝる夜の一言には、身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大路ゆく辻占賣の聲、汽車の笛の遠くひびきたるも、何とはなしに魂あぐがるゝ心地す。

(樋口一葉一葉全集)

日は入日。入りはてぬる山ぎはに、光のなほとまりて赤う見ゆるに、うす黄ばみたる雲のたなびきたるいとあはれなり。月は有明。東の山の端にほそうていづるほどあはれなり。

(清少納言一枕草子)

神田
東京市神田區。

八 處世の道

毎々御面倒相願候處早速神田の方へ御送り下され候由、多謝の至りに候。

學校を卒業して一日のうち世の中が恐ろしくなつたから、これから餘程注意を周密にする由、結構に候。

併し周密といふ意味に上等と下等とあり。自己の智力にて出來得る限り考へ、自己の感情にて出來得る限り感じ、而して相手と自己とに不都合の破綻なき様にするを上等といひ、唯人を見て泥棒の如く疑ひ、何でもこそく、と先を制する様な事を得意とする、これを下等の周密といふべく候。

君の感じたるは如何なる方面に於ての意味なるや知らざれども、若し前者ならば、賢の方へ一步進みたるなり。若し後者なら

ば、愚の方へ一步進みたるなり。世上幾多の才子は、愚に近づきつゝ自ら賢に進むと思へり。利害の關係なき三者より忌憚なく是等の人を評して見んか、學校に居るうちの方が遙かに上等にして、卒業して世の中に居る時の方が餘程下等なり。然も自らは頗るワイズになりたる如く考ふる人多し。是程いやな現象は之なく候。

世の中が恐ろしき由、恐ろしき様なれど存外恐ろしからぬものに候。若し君の弊を言はば、學校に居るときより世間を恐れ過ぎて居る事なり。君は家に在りて親父を恐れ過ぎ、學校に在りて先生と朋友とを恐れ過ぎ、卒業して世間を恐れ過ぐ。その上に世の中の恐ろしきを悟らば却つて困る位に候。恐ろしきを悟る者は用心す。用心は大概の場合、人格を下落せしむるものに候。世上の所謂用心家を見給へ。世を渡る事は即ち巧みな

自らかへりみて
云々
孟子に、自反
而縮、雖、千萬
人、吾往、矣、
とあり。

らん。然も親友となし得べきか。大事を託し得べきか。利害
以上の思慮を闘はずに足るべきか。沈思これありたく候。
世を恐るゝは非なり。生れたるこの世が恐ろしくては生き居
るのが苦しかるべし。余は君にもつと大膽なれと勸む。世の
中を恐るなと勸む。自らかへりみて直くんば千萬人といへど
も我行かんといふ氣象を養へと勸む。天下は君の考ふること
く恐るべきものにはあらず。存外太平なるものに候。唯一箇
所の地位が出来るか出来ぬか位にて天下は恐ろしくなるべき
ものにあらず。どこ迄行きても恐るべきものにあらず。免職
と増俸以外に人生の目的なくんば、天下は或は恐ろしきものか
も知れざれど、天下の士、一代の學者はそれ以上に恐ろしき理由
を口にせずんば恥辱と存候。勉旃勉旃。
(夏目漱石―漱石全集)

九 熊 野 落

熊野
和歌山縣西牟婁
郡に在り。

大塔宮

ダイタフノミ
ヤ。護良親王の
こと。

二品

ニホン。親王の
位階。親王に賜
ふ位は一品より
四品まであり。

笠置

京都府相樂郡笠
置村にある山の
名。山上の古
寺を笠置寺とい
ひ、後醍醐天皇
の行在所たりし
處なり。

般若寺

ハンニヤジ。奈
良市奈良坂の南
にある律宗の
寺。孝徳天皇の
朝建立。
主上
後醍醐天皇。

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されむ爲に、暫く南
都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚
はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を踏むおそれ、御身の上に迫
りて、天地廣しと雖も御身を隠さるべき處なく、日月明かなりと雖
も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鞆の床
に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にたゞずみて、人を咎むる里の犬に御
心を惱まされ、何處とても御心安かるべき處なかりければ、かくて
も暫しはと思し召されける所に、一乘院の候人按察法眼好專、いか
にして聞きたりけむ、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せた
りける。折ふし宮に付き奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ
防ぎて、落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵既に

虎の尾を踏むおそれ

極めて危険なるに譬ふ。書經に、「心之憂危若踏虎尾、涉于春氷」とあるに

鴉の床

こゝはいぶせき床の意。

一乗院の候人

一乗院は奈良にありしが今はなし。候人とは門跡家に使はる家臣をいふ。

按察法眼好事

アゼチホフゲンカウセン。

おし肌脱がす大般若

大般若經。大般若波羅密多經の略。六百卷。唐の玄奘三藏の譯。

唐櫃

カラウド。又はカラウヅ。又はピツ。脚ありて唐風に作りたる

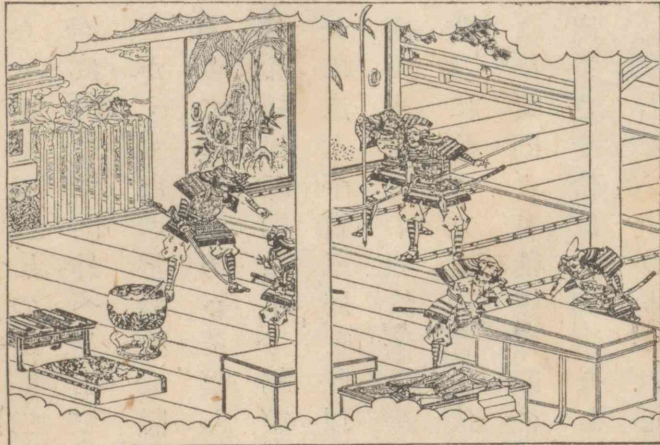
櫃

寺内に打入りたれば、紛れて御出であるべき方もなし。さらば、よし自害せむと思し召して、既におし肌脱がせ給ひたりけるが、事叶はざらむ期に望みて、腹を切らむことはいと易かるべし。若しやと隠れて見ばやと思し召し返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋を開けず。一つの櫃は御經を半ば過ぎ取出して蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃のうち、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隠形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突立てむと思し召して、氷の如くなる刀を抜きて御腹にさし當て、兵こゝにこそ」といはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、おし量るもなほ淺かるべし。さるほどに、兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも、残る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ怪しけれ、あ

隠形の呪

オンギヤウのジニ。身を隠す呪文のこと。

夢に道行く心地



の大般若の櫃を開けて見よ」とて、蓋したる櫃二つを開けて御經を

佛殿の搜案

取出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命を繼がせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若し又兵立ちかへり、委しく搜すこともあらむずらむと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入替らせ給ひて、ぞおはしける。案の如く、兵どもまた佛殿に立ちかへり、前に蓋の開きたる御經を皆打移して見けるが、からか

玄舁三藏
ゲンザウサンザ
ウ。支那唐代の
法相宗の高僧の
柿の衣
赤黒色にして無
紋の衣。山伏の
服。

箆
オヒ。負の義。
山伏行脚僧など
の旅行する時、
佛具・食物など
を入れて背に負
ひて歩く物。

頭巾
トキン。



龍樓鳳闕
皇居の意。龍樓
は東宮御所。鳳
闕は皇居。
華軒香車
華美なる車。
單皮
タビ。皮製の足
袋。

らと打笑ひて、大般若の櫃の中をよく／＼搜したれば、大塔宮はい
らせ給はで、大唐の玄舁三藏こそおはしけれ。」と戯れければ、兵皆一
同に笑ひて、門外へぞ出でにける。
かくては、南都邊の御隱家も叶ひ難ければ、乃ち般若寺を御出で
ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御伴の衆には、光林坊玄
尊、赤松律師、則祐、木寺相摸、岡本三河坊、武藏坊、村上彦四郎、片岡八郎、
矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御伴の者
までも、皆柿の衣に箆を掛け、頭巾まゆはん眉半にせめ、その中に年長ざるを
先達さきだちに作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。
この君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を
出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじ
と、御伴の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習
はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾、草鞋を召して、

脚巾
ハギキ。脚絆。

由良の湊
兵庫縣淡路島の
東岸に在る湊の
濱ゆふ。

常緑多年生の
草。夏季白色の
花を開く。
藤代
和歌山縣海草郡
に在り。

和歌・吹上・玉津
島
共に和歌山縣和
歌山市に在り。
雨を含める云々

唐の盧綸の詩に、
「田園アサヒ暮トキ、
洒ス裳シヨウ、滿野蓬ミツノモウ生ナ、
古戰場コシヨウ、孤村樹コリムキ、
色昏シヨク、殘雨ザンウ、遠寺トウジ、
鐘聲帶ショウセイ、夕陽セキヤウ、
とあるにもとづ

伊弉諾・伊弉冉
の應作
諸再二尊が兩所
權現となりてあ
らはれ給ひしな
りとの意。

少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給
はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見咎
むる事なかりけり。

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも、
知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、藤代の松に懸れる磯
の浪、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだ
に、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹
夕べを送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著き
給ふ。

その夜は、叢祠の露に御袖をかた敷きて、終夜祈り申させ給ひけ
るは、傳へ承る、兩所權現はこれ伊弉諾、伊弉冉の應作なり。我が君
その苗裔として、いま朝日忽ちに浮雲の爲に隠されて冥闇たり。
豈痛まざらむや、玄鑒むなしきに似たり。神若し神たらば、君何ぞ

玄鑿
ケンカン。神佛
の深遠なる照
覽。

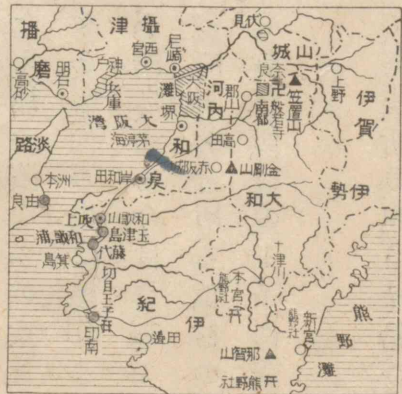
角髮

ピンヅラ。「みづ
ら」の音便。頭
髪を頂より兩方
に分けてわがね
て下げたる結ひ
方。

熊野三山

本宮・新宮・那智
をいふ。何れも
和歌山縣東牟婁
郡に在り。
十津川
奈良縣吉野郡熊
野川の上流十津
川の沿岸一帯の
部落。

君たらざらむ」と、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申さ
せ給ひける。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらむと、神慮も暗
に計られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕
として、暫く御目睡ありける御夢に、角
髮結ひたる童子一人來て、熊野三山の
間は、猶も人の心不和にして、大義なり
難し。これより十津川の方へ御渡り
候ひて、時の到らむを御待ち候へかし。
兩所權現より案内者に附け參らせら
れて候へば、御道しるべ仕るべく候」と
申すと御覽ぜられ、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なり
けりと、頼もしく思し召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、やが
て十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。



山路もとより雨
なく云々
唐の王維の「荆
溪田白石」天
寒紅葉稀。山路
元無雨。空翠
濕人衣。」の句
にもとづく。
萬仞の青壁云々
和漢朗詠集に大
江澄明の作とし
て「山復山、何工
削、成青巖之形。
水復水、誰家染、
出碧潭之色。」
とあるによる。
太平記
四十卷。花園天
皇の文保二年
(九七八)より
後村上天皇の正
平二二年(二二
〇〇二七)に至る
五十年間の戦亂
のさまを記せる
書。作者未詳。

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或
は高峯の雲に枕を敬て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍
び、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣
を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁刀に削り、見おろせば千丈の碧潭
藍に染めたり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身も草臥
れ果て、流る、汗水の如し。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染れ
り。御伴の人々も、その身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はかば
かしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手をひきて、路のほど
十三日に十津川へぞ著かせ給ひける。

(太平記)

一〇 自然美の心象

我々人間にとつての共通環境たる自然と、我々の日常生活とは、普通人々が思つてゐる以上に、密接な関係があるのである。



してゐることを示してゐるからである。我々の生活が取亂れて

自持で聽き得るやうな時は、そのこと自身で、既に我々

何故なればその時、我々は自分の生活を確かに支配



新 緑

新緑の影がうつくしく、鳥の美しき鳴聲が、静かなる川に、心をなやませ、自然の美しき心象を、我々の生活に、深く刻み込んで、幸福の意味を、もたらすのである。

わーお前か

お前かわーか

わーはお前のわーとヤーの

静かな確かな生活



天變地異

豫見

前もつて知ること

癩癩

カンシヤク

ある時は、朝鳴く鳥の聲すら耳にはひらないのである。

さらに天文を見て人事の變異を察するといふ事も、舊時はよく言はれたことである。これも天變地異に際しては、人の心が亂れがちである。常日頃の道徳規律では支配せられない心理状態に、人心が動揺することを豫見するのである。

我々が、砂塵が風に吹きまкруるゝ中にまき込まれる時は、不愉快でたまらない。何となく氣がいらくゝして来る。心落著かず、癩癩が起つて来る。これも事實である。けれども、その砂塵の舞ひ立つ中にも、一種の力が現れてゐる、一種の美が現れてゐると感ずる人があるとすれば、その人は既にその人の心を攪き亂す自然現象を、自分の心をもつて取押へ、支配してゐるのである。

自然美を味はふといふ事は、つまり、この人間に迫り、人間の心を攪き亂す自然現象を、自分のものとして支配し、左右し、自由にする

自然美を静かに確かに味はふことは、つまり、平靜な確かな生活をすることである。いかに美しき空の下に立たうとも、いかに

心象

ことである。若しさうすることが出来ない場合には、人々は常にこの自然現象に壓倒せられてゐるのである。
朝鳥の鳴く音が楽しく聴かるれば、一日の生活が幸福であると卜するのは、即ち鳥の鳴音の中に美を見出したことであり、その鳥の鳴聲といふ現象を、自分の心の力で支配し、左右したことであり、自分の心の力がいかにも平かに、おだやかに働いてゐることを示してゐるのである。但し、我が心の働きといふのも、要するに一種の自然現象である。それ故、外界の自然現象を、心の働きをもつて支配するとは、つまり、我々の心の内外の現象が、一致し、調和し、平靜になごやかになつた姿を指すのであつて、自然美とはかゝる境に浮び上る心象を呼ぶのである。
この自然美を、靜かに確かに味はふことは、つまり、平靜な確かな生活をすることである。いかに美しき空の下に立たうとも、いかに

鐵の壁

に壯美な山嶺の前に身を置かうとも、若しはつきりした心を持たなければ、その美は心の中に浮び上らない。空は灰色であると同じく、山はうるさい鐵の壁となる。

奢侈放逸
シヤシハウイ
ツ。

物質欲

けれども自然美は決して贅澤な心には映じない。奢侈放逸な者の眼に映ずるものは、自然の美ではなく、寧ろ自然への所有欲である。心力の支配でなく、物質欲の支配である。平靜な心力ではなく、束縛せられたる心の働きである。心の平靜統一は、内から外へ向ふと共に、また外から内へ流れる。



ぎらとせ

一莖の草花でも自然の大きなものの片影であり、暗示である。大空を仰ぎ見ることとも出来ない人家の密接してある窓際に見かける一莖の草花は、大きな緑の平原の力を、人々の心の上に發揮するのである。

自然美の浮ぶのは、美しい景色や、有名な名所に於てではない。それ等を探して歩くにはあたらぬ。我々の身邊日常の生活に於て、日の光のなかに、吹きすぐる風の中に、一片の空色の中に求め得らるゝのである。自然の美は畢竟我々の尊き心象である。

(吉江喬松—自然讀本)

吉江喬松
號は孤雁。文學博士。佛文學者。早稻田大學教授。長野縣の人。明治十三年生。

雲は

白き。紫。黒き雲あはれなり。風吹くをりの雨雲。明けはなる、ほどの黒き雲の、やうく白うなり行くもいとをかし。月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

(清少納言—枕草子)

一一 岩室

岩室
富士山八合目の岩室。瑠璃ルリ。

汪洋
ワウヤウ。

岩室の外に出づるに、陰曆七月十八日の月は、脚下の雲の間より上りて、空は瑠璃のやうに澄みたり。絶頂より吹きおろす風、寒しとも寒く、山頂は空中に一大黑影を描きて、月の行手を遮ぎらむとするに似、月の光に映じて蒼白き光を放てる牛が窪の雪の色、凄愴とやいはん、荒涼とやいはん。麓は白雲低く掩ひ、月その上に照りて、雲海汪洋たり。

天地に物音もあらず、大きそらは月たゞ一つかゝりてありけり

夜氣寒うして久しく居るべからず。岩室に入るに、カンテラの光ほの暗く、夜は更けぬ。老いたる室守も、若き剛力も、爐のほとりに眠れり。

天ちかきむろの岩床夜をさむみ人の世こひし人の身われ
は
朝四時起き出でつ。室守に水を請ひて嗽ぐに、冷やかなること
いふべからず。睡氣惰氣直ちに去れり。即ち懸崖に立ちて日の
出を見る。

夜は未だ明けず。一筋の灰色の横雲、明かに天地を兩斷せり。
天の雲に接するところ、微紅を加へたる卵黄色をなし、稍上りて黄
色を爲し、次いで淡黄色を爲し、終に紺碧の穹窿を爲して四邊に垂
る。仰ぎ見れば、残月は薬師が丘の頂に懸りて、溶銀のやうに凄き
光を放ち、星かげ二つ三つ微茫としてこれを周る。天風面を吹く。
待つこと少時、天地稍白みそめ、大空と雲との間に微光を見るや、雲
は横さまに裂けて、眩きばかりの光を見る。雲端紅焼し、紫燃し、黄
灼するよと見る間に、千萬條の光、八表を射て朝日は上りつ。天地
八表を射る

穹窿

キユウリユウ

高くゆみなりに
曲ること

微茫

ビバウ

赭黑色

シヤコクシヨ
ク。あかぐろき
色

雲の衾

山中の湖

山梨縣の南部に
在り。富士五湖
の一。

酒匂川

神奈川県西部
に在り。南流し
て相模灣に注
ぐ。

は忽ち明けたり。天風また一しきり吹き出でて雲霧を拂ひ、麓の
大野は、散り行く雲を隔てて縹渺と青白く見え透き、焼石の大傾斜
微光に照らされて赭黑色を現ずる様、奇觀いふべからず。雲の衾
を纏ひて眠れる脚下の連山は、夢のやうに淡き姿を爲して連互し、
水銀の一雫を滴らしむる如く見ゆるは箱根の湖、隴銀もて鑄たる
三日月のやうなるは山中の湖、酒匂川は銀の針の如く、富士川は白
蛇の這ひ行くが如く、やうく、に明けもて行く景色、一々眸に入り
來り、氣象極めて壯快、頂上第一の偉觀、こゝにいたりて極まりぬ。
身もきよく心きよくて山の上の我が身そゞろに神かとぞ
思ふ
おもふ
もゆる火のもえたつ上に天ざらひみ雪ふりけむ神代をし
もゆる火のもえたつ上に天ざらひみ雪ふりけむ

山ざくら

尾上柴舟

名は八郎。文學博士。東京女子高等師範學校教授。岡山縣の人。明治九年生。

野火

ノビ。

木下利玄

子爵。歌人。東京の人。大正十四年歿。年四十。

せらぎ

浅き瀬などに水の流るゝ音。

碓氷嶺

群馬縣と長野縣との間にある峻嶺。

一三 草山の月

尾上柴舟

つけすてし野火の煙のあかくと見えゆくころぞやまはかなしき

木下利玄

この峽にわれ一人なり近くにてほそく澄めるせらぎの音 静寂

北原白秋

碓氷嶺のみなみおもてとなりにけり下りつゝおもふ春のふかきを

若山牧水

尾上柴舟の弟

若山牧水

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなりやまざくら花

島木赤彦

正岡子規の弟 左平夫ノ弟子

島木赤彦

春雨の雲のあひだよりあらはるゝ山のいたゞきは雪眞白なり

たくなづく

たくなづく 愚まり重なる。

青山の秀

青山の美稱。 山脈のやまは 木もまてたかたつた。

齋藤茂吉

たくなづく青山の秀に朝日子の美のひかりはさしそめにけり

今井邦子
た、なはるあをがき山のはてにしてうすぐもと見ゆ火山
浅間は

片山廣子
筆名松村みね
子。歌人。翻譯
家。東京市の人。
明治十一年生。

片山廣子
尾のひかる白きけもののかたちして雲ひとつ通る浅間の
おもてに

久保田不二子
歌人。長野縣の
人。明治十九年
生。
島本赤彦の
夫人

久保田不二子
白樺のたかき木ぬれにあふぐ空あけしらみつゝひかる星
見ゆ

杉浦翠子
こゝに見る信濃山脈はてしらずいづべの山にわが呼びか
けむ

與謝野晶子
歌人。大阪府堺
市の人。明治十
一年生。

與謝野晶子
金色のちひさき鳥のかたちしていてふ散るなり入日する
丘

界
界
界

若山喜志子
歌人。長野縣の
人。明治二十一
年生。

若山喜志子
冬の日をひたとあびたる赤城嶺のなだれて長き線のさや
けさ

六三

一三 重盛の諫言

太政入道
平清盛
人々數多云々
鹿が谷に於て平家討滅をはかりし人々をさす。即ち藤原成親・俊寛・平康頼・西光等なり。

筑後守貞能
姓は平氏。家貞の子。
保元に云々
保元の亂のこゝと。保元元年(一八一六)

平右馬助
清盛の叔父忠正。

新院
崇徳上皇。
一の宮
崇徳上皇の第一皇子。重仁親王。

刑部卿
清盛の父忠盛。忠盛は重仁親王の傳たり。

太政入道は、かやうに人々數多いましめおきても、なほ心ゆかずや思はれけむ、既に赤地の錦の直垂に、黒糸緘の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜の序に靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。

「貞能」と召す。

筑後守貞能は、木蘭地の直垂に緋緘の鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、このこといかゞ思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてましまししかば、

故院

鳥羽法皇。

平治元年云々
平治の亂のこゝと。平治元年(一八一九)

院

仙洞。こゝにては後白河法皇。

内

内裏。こゝにては二條天皇。

經宗・惟方

共に藤原氏。平治の亂の際、始め信賴に黨せしが、後悔いて二條天皇を奉じて六波羅に入る。

鳥羽の北殿

今の京都市下京區上鳥羽町に離宮ありき。

旁、見はなち参らせがたかりしかども、故院の御遺誠^{いせいのまこと}に任せて、御方にて先を驅けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下くらやみとなつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追ひ落し、經宗、惟方を召しおこしめしに至るまで、君の御爲に既に命を失はむとすること度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに、君のつかせ給ひて、やゝもすればこの一門滅ぼさるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。しばらく世を鎮めむほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし参らせむと思ふはいかに。

きせなが

小松殿
重盛の邸。小松谷にありき。今の東山區の中。

法住寺
京都市下京區の三十三間堂の東にありき。

禪門
佛門に入りたる男子の稱。禪尼の對。こゝは清盛をさす。

その儀ならば、定めて北面のものが中より、矢をも一つ射むずらむ。その用意せよと、侍どもに觸るべし。大方は、入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ。きせなが取出せ。」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳せ參つて、「世ははやかう候。」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の頭の勿ねられたんな。」と宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿のおんきせながを召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せむとこそ出で立ち候ひつれ。暫く世を鎮めむほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせむとは候へども、内々は鎮西の方へ流し參らせむとこそ擬せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何によりて只今さることのおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしきことも

西八條殿
清盛の邸宅。

卿相・雲客

受領
ジュリヤウ。又はズリヤウ。國司の實務に携はる者。

衛府
左右の近衛・兵衛・衛門府の稱。

内府
へうする

五戒
殺生戒・偷盜戒・邪淫戒・妄語戒・飲酒戒。
五常
仁・義・禮・智・信
面はゆし

やおはすらむとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。門前にて車より下り、門の内へさし入つて見給ふに、入道腹巻を著給ふ上、一門の卿相・雲客數十人、各色々の直垂に思ひくゝの鎧著て、中門の廊に二行に著かせられたり。その外、諸國の受領衛府諸司などは、縁にゐこぼれ、庭にもひしとなみたり。旗竿など引きそばめ引きそばめ、馬の腹帯をかため、冑の緒をしめ、只今皆打立たむずる氣色どもなるに、小松殿烏帽子直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入給へば、ことの外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするやうに振舞ふものかな、大きに諫めばや。」と思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を紊らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を著て對はむこと、さすが面はゆう恥づかしうや思はれけむ、障子を少し引立て、腹巻の上に素絹

舍弟

の衣をあわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見
えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へくぞし給ひける。
大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝこと
もなく、大臣もまた申上げらるゝ旨もな
し。

結構

やゝあつて、入道宣ひけるは、あの成親
卿が謀叛は、事の數にも候はず。一向法
皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世
を鎮めむほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷
し参らするか、然らずば、これへまれ御幸
なし参らせむと思ふはいかに。と、宣へば、大臣聞きもあへ給はず、は
らくとぞ泣かれける。
入道、さて、いかにや、いかに。と、あきれ給へば、稍あつて、大臣涙を押



盛重平

かたまたまはさう
下りなすまる
邊地粟散の境

天兒屋根命
藤原氏の祖。天
照大神に仕へ天
孫降臨の時に隨
從せり。

弓箭を帶す

破戒無慙

普天の下
詩經、小雅にあ
り。

瀬川云々
許由を指す。
首陽山云々
伯夷・叔齊を指
す。

へて、この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運
命の傾かむとは、必ず悪事を思ひ立ち候なり。また御有様を見
参らせ候に、更に現とも覺えず候。さすが我が朝は、邊地粟散の境
とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御
末、朝の政を掌らせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官に至る人の
甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くにあらざや。就中御出家の御身なり。
法衣を脱捨てて、忽ちに甲冑を鎧ひ弓箭を帶しましまさむこと、内
には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも
背き候ひなむず。旁、恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を
残すべきにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母
の恩、衆生の恩、これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の
下、王地にあらざといふことなし。されば、かの瀬川の水に耳を洗
ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背きがたき禮儀をば存知す

蓮府槐門

レシフクワイモ
ン。大臣の意。

進止

神は非禮を受け
ず

禮記に出づ。

聖德太子

厩戸皇子。用明

子。推古天皇二

十九年薨。御年

四十九。(一三三

三—二八一)

人皆心あり云々

十七條憲法第十

條に、人皆心有

リ。心各執有

リ。彼是非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

レバ、我非ナ

とこそ承れ。いかに況んや、先祖にもいまだ聞かざりし太政大臣
を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位
に至る。加之國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進
止たり。これ稀代の朝恩にあらざや。今、是等の莫大の御恩を思
し召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を傾け參らせ給はむこ
と、天照大神、正八幡の神慮にも背かせ給ひ候ひなむず。それ日本
は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば、君の思し召
し立たせ給ふところ、道理半ばなきにあらず。中にもこの一門は、
代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めし事は無雙の忠なれども、
その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇
條御憲法に、人皆心あり。心各執あり。彼を是し我を非し、我を是
し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環
の如くにして端なし。爰を以て、たとひ人怒るといふとも、却つて

加之

冥慮

敍爵

千顆萬顆の玉

和漢朗詠集、菅
原文時、の詩に、
「登、日、登、風、
高低千顆萬顆之
玉、染、枝、染、浪、
表裏一入再入之
紅」とあるによ

我が咎を懼れよ。とこそ見えて候へ。然れども當家の運命未だ盡
きざるによつて、御謀叛已に露れさせ給ひ候ひぬ。その上仰せ合
はせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議
を思し召し立たせ給ふとも何の恐か候べき。所當の罪科行はれ
ぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈、奉公
の忠勤を盡し、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加
護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば、君
も思し召しなほすこと、などか候はざるべき。君と臣とを比ぶる
に、親疎分く方なし。道理と僻事とを並べむに、いかでか道理に附
かざるべき。是は尤も君の御理にて候へば、叶はざらむ迄も院中
を守護し參らせ候べし。その故は、重盛初め敍爵より今大臣の大
將に至る迄、併しながら君の御恩ならずといふことなし。その恩
の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案

迷廬八萬
須彌山のこと。
大海の中にあり
て、高さ八萬四
千由旬ありとい
ふ。

蕭何
前漢の創業の功
臣。漢の三傑と
稱せらる。
高祖
劉邦。前漢第一
世の帝。(西暦
前一九五)

ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらむ。然らば院中に参り籠
り候べし。その儀にて候はば、重盛が身に代り命に代らむと契り
たる侍ども少々候らむ。これらを召し具して、院の御所法住寺殿
を守護し参らせ候はば、さすが以ての外の御大事にてこそ候はむ
ずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さむとすれば、迷廬
八萬の巔よりも尙高き父の恩忽ちに忘れむとす。痛ましきかな、
不孝の罪を逃れむとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣ともな
りぬべし。進退これきはまれり。是非いかにも辨へ難し。申し
受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供
をも仕るべからず、また院中をも守護し参らすべからず。されば、
かの蕭何は大功かたへに越えたるによりて、官大相國に至り、劍を
帶し沓を履きながら殿上へ昇ることを許されしかども、叡慮に背
くことありしかば、高祖重う戒めて深う罪せられにき。かやうの

先蹤
センシヨウ。

再び實なる木云
云
淮南子に、「夫再
實之木、根必傷し
とあるによる。
果報

先蹤を思へば、富貴といひ榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁、極
めさせ給ひぬれば、御運の盡きむこと難かるべきにあらず。富貴
の家には祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷むと見えて
候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて、亂れむ世をも見候べ
き。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂き目に遭ひ候重盛が果報の
ほどこそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引
出されて、重盛が頭の刎ねられむずることは、いと易きほどの御事
にこそ候はむずらめ。これを各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞るば
かりにかき口説き、さめくと泣き給へば、その座に並み給へる
平家一門の人々、皆袖をぞ濡らされける。

(平家物語)

一四 平家の末路

一 清 盛

世にも哀れなるは平家とぞいふめる。まことに此の一門の盛衰を考ふれば、心も言葉もなか／＼に及ばざりけり。案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず、秋の嵐の吹荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほ臆にして、覺めての後は、さすがにうき世と觀じて、先世後代既に梭をかへたるを如何にすべき。今を昔にかへさんすべもかた絲の、よりくづれたる世こそ返す／＼も是非なけれ。されば、風雅にかくれては、一題の遺詠に、今生の本懐を終へ、恩愛にほだされては、己が身の現在に來世の果報を思はず。哀れは桐の一葉に散初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば奇しきまでに哀れなりける運命かな。

一題の遺詠に云

平家都落の際、平忠度京都に引返し藤原俊成の門を叩き、遺詠一卷を託す。後、故郷花と題する一首、千載和歌集に選ばれしことを指す。
恩愛にほだされては云々
維盛が都に留め置きし妻子に戀戀たりし事を指す。

權柄
ケンペイ。

攝籙
攝政の異稱。

成敗

ヤイバヤ

賀茂

官幣大社。上下の二社あり。賀茂別雷命・玉依姫を祀る。上社は京都市上京區上賀茂、下社は左京區下鴨宮河町にあり。

嚴島

官幣中社。市杵島姫を祀る。廣島縣佐伯郡嚴島町にあり。



平清盛肖像と筆蹟

さるにても入道相國こそ、なか／＼に氣強き男なりけれ。弓矢のいさをし、早畢んぬ。朝家の權柄、今はた盛りなり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國に互りて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗皆こゝに集まる。昔は殿上の交りをだに嫌はれし人、今は此の人ならでは人にあらじ。とうたはれ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これがために目を敬つるばかりなり。されば、十善の帝王、畏くも外戚の威におされ給ひ、八幡賀茂の御幸は、八重の潮路を嚴島へとぞ觸れられける。なにがしの卿が、入る日をも招きかへさんずる勢ひ。と書かれしも、げにことわりなりきとぞ覺ゆる。

卿相・雲客
射山

藐姑射山の略。
上皇御所の稱。
重代の帝座云々
治承四年(一八
四〇)の福原遷
都を指す。

愛宕の里云々
平家物語に、百
年を四かへりま
でにすぎ來にし
愛宕の里の荒れ
やはてなむ。と
あるによる。

維盛
平重盛の長子。
歿年未詳。

木曾の山氣云々
治承四年木曾義
仲兵を信濃に起
し、壽永二年(一
八四三)京に入
る。

兩山の衆徒
比叡山と奈良と
の僧徒達をい
ふ。

不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人なきやうに振舞はれけるこそゆゝしけれ。茲に卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人。法皇の御身を以てしても、城南の離宮に射山の嵐を偲ばせ給ふ。中にも、重代の帝座俄かに動きて、愛宕の里の哀れをとゞめけるこそ、なかくにあさましかりしか。

咲きも残らず、散りも始めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黄句の鎧著て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀、帶佩こそ、あつばれ平門隨一の貴公子にはあんなれど、富士川の水禽に算を亂しし十萬餘騎は、徒に後世の笑をとゞめたるに過ぎず。加ふるに、俄かに雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒亦既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益、急なり。時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の床の寂しきに、霜夜の鐘

保平のいさをし
保元・平治二亂
の戦功をいふ。

罪業
ザイゴフ。
恩愛の絆

六慾煩惱

欣求
ゴング。

の響の枕に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際のこの身ぞと觀じたる時、かれ果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に餘りて、保平のいさをし又言ふに足らずと思はざりしか。己につらかりし人々を、かくまでに惱まししことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせしことの中にも、非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆に、うたゝ悔恨の心をうごかすこと無かりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發する事無かりしか。皆あらず。入道は死に至るまで、其の初念を翻す事あらざりき。彼は正にその生

南都の餘燼
治承四年(一八四〇)十二月、平重衡、奈良東大寺、興福寺を燒

墨股の勝鬨
養和元年(一八四一)三月、平知盛等、源行家を尾張の國墨股に討ち大いにこれを破る。

信越俄かに云々
養和元年(一八四一)平氏屢、義仲に破らる。

比叡の云々
壽永二年(一八四三)七月、義仲入京して延暦寺に據る。

み吉野の云々
古今和歌集に、よみ人知らずとして、み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき世むしとあるに

西國
壽永二年(一八四三)七月、宗盛等天皇を奉じて西海に走る。

けるが如くにして死したりき。

二 都 落

凡そ人の世に傳へ遺されし史は多かれど、平家の都落ばかり、あはれにもまた目覺ましきは無かるべし。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨尙響きぬるに、信越俄かに雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治淀の備へもろくも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ、一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きに、み吉野のあなたに隱家も無きか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人の哀れの限りもなし。また歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅池殿西八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となし果てぬることあわたしかりしか。

椒房

セウバウ。

故郷を云々

平家物語、平經盛の歌に、ふるさとを焼野が原とかへりみて末も煙の浪路をぞ行くしとあるによる。

黒金の衣

弓矢の響

翠華

スキクラ。

こゝに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元此の方

天下の榮華をつくしたる花の都の故郷を、焼野の原と顧みて、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすららん。直衣束帶の身にも今は黒金の衣を著けたれども、誰かは詠歌の餘哀になれて、弓矢の響を勵むべき。さてもすて難き命や。今こそは憂世なれ。流星にしのばるゝ昔の様の、夢に入るをば如何にせん。翠華揺々として西に向へば、秋風到る處の野に滿てり。嗚呼、昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなた空とやおぼしけん、日暮舷に笛吹く人あり。響は遠く煙波を掠めて、三軍齊しく耳を敬つ。嗚呼、此の時、此の人、想ひ果して如何。

(高山樗牛—樗牛全集)

三軍

源信

俗姓下部氏。天台宗の高僧。慈慧大師に仕へて天台の奥義を究め、横川に屏居して著述に専念せり。又、繪畫・彫刻をもよくせり。寛仁元年歿。年七十六。(一六〇二—一六六七)
横川
比叡山の三塔の一。

三條の太后
圓融天皇の皇后。寛仁二年崩御。御年六十一。

一五 源信僧都の母

今は昔、横川の源信僧都は大和の國の人なり。幼くして比叡の山に登りて、學問して、やむごとなき學匠になり、にければ、三條の太后の宮の御八講に召されにけり。八講畢りて後、賜はりたりける捧物の物どもを少し分けて、大和の國にある母の許に、かくなむ、后の宮の御八講に参りて賜はりたる。始めたる物なれば、まづ見せ奉るなり。』とて遣したれば、母の返りごとには、「はく、おこせ給へる物どもは喜びて賜はりぬ。かくやむごとなき學匠になり給へるは、かぎりなく喜び申す。但し、かやうの御八講に参りなどしてあるき給ふは、法師になし聞えし本意にはあらず。そこにはいみじく思はるらめども、姫の心にはたがひにたり。姫の思ひしことは、女子は數多あれども、男子はそこ一人なり。それを元服をもせさせ

多武峰の聖人
増賀聖人。橋坂平の子。天台宗の僧。慈慧大師に就きて學び、後、大和の多武峰に住めり。長保五年歿。年八十七。(一五七七—一六六三)

ずして比叡の山に上げたるは、學問して、身の才備はりて、多武峰の聖人のやうに、貴くて、姫の後世をも救ひ給へと思ひしなり。それにかく名僧にて花やかにあるき給はむは、本意にたがふことなり。われ年老いぬ。生きたらむ程に、聖人にしておはせむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしか。』と書きたり。

極めたる善人

僧都これを披き見るまゝに涙を流して、泣くく、また返事を遣していはく、源信は更に名僧たらむ心なし。たゞ母君の生き給へる時、かくの如くやむごとなき宮ばらの御八講などに参りたるを、聞かせ奉らむと思ふ心深くして、急ぎ申しつるに、かく仰せられたれば、極めてあはれに悲しく嬉しく思ひ奉る。さらば、仰に隨ひて、山籠りを始めて聖人にならむ。今は逢はむと仰せられむ時にぞ参るべき。然らざらむかぎり、は山を出づべからず。但し、母と申せども、極めたる善人にこそおはしましけれ。』と書きて遣りつ。そ

胸おちる

あからさま

の返りごとにはく、今なむ胸おちみて、冥途も安くおぼゆる。かへすがへす嬉しく思ひ聞ゆ。ゆめく、おろそかにおはすべからず。と。僧都これを見て、この二度の返りごとを、法文の中に卷きおきて、ときく、取りいだして見つゝぞ泣きける。

あからさま

かくて山に籠りて、六年は過ぎぬ。七年といふ年の春、母の許にいひ遣りていはく、六年は既に山籠りにて過ぎぬるを、久しく見奉らねば戀しくや思し召さむ。然らば、あからさまにまうでむ。と。返りごとにいはく、げに戀しくは思ひ聞ゆれども、見えむにやは罪は滅びむずる。なほ山籠りにておはせむを聞かむのみぞ嬉しかるべき。これより申さざらむかぎりは出で給ふべからず。と。僧都これを見て、この母君は常人にもなき人なりけり、世の人の母はかく言ひてむやと思ひて過す程に、九年になりぬ。告げざらむ限りは來るべからずといひおこせたりしかども、怪

さはれ

しく心細く思ひて、母の俄かに戀しくおぼえければ、若し母君の失せ給ふべき時の近くなりたるか、又わが死ぬべきにやあらむと、あはれにおぼえて、さはれ來るべからずとはのたまひしかども、まうでむと思ひて、出でたちて行くに、大和の國に入りて、道にて、文を持ちたる男に逢へり。僧都、いづくへ行く人ぞ。と問へば、男のいはく、しかくの母君の、横川におはする子の御坊の許へ遣す文なり。と言へば、しかいふは我なり。と言ひて、文を取りて、馬に乗りながら行くく、披きて見れば、母君の手にはあらで、あやしのさまに書かれたり。胸ふたがりて、如何なる事のあるにかとおぼえて讀めば、「日ごろ何ともなく風のおこりたるかと思ひつるに、年の高きげにやあらむ、この二三日弱りて、力なくおぼゆるなり。申さざらむかぎりには出で給ふべからずとは心強く聞えしかども、かぎりの時になりぬれば、今一たび見たてまつらでや止みなむずらむと思ふに、

あながちに

かぎりなく戀しくおぼえ給へば申すなり。疾く／＼おはせ。」と書きたるを見るに、怪しく心にかくおぼえつるは、かくありければこそありけれ、親子の契はあはれなることとは言ひながら、佛の道にあながちに勧め入れ給ふ母なれば、かくはおぼえけるなりけりと思ひつゞくるに、涙雨の如く落ちけり。弟子なる學匠ども二三人ばかり具したりければ、それらにも、かゝることのありければなりけり。」と言ひて、馬を早めて行きければ、日暮にぞ行きつきたりける。

無下

ムゲ

急ぎ寄りて見れば、無下に弱くなりて、たのもしげもなし。僧都「かくなむまうで來たる。」と高やかに言へば、母君「いかで疾くはおはしつるぞ。今朝曉にこそ人は出し立てつれ。」と。僧都のいはく、「かくおはしければにや、近ごろ戀しくおぼえ給ひつれば、参りつる程に、道にして使には逢ひたるなり。」と。母君これを聞きて、「あな嬉し。

道心

機縁

往生

ワウジャウ。

善知識

カ

死の時には逢ひ給ふまじきにかとこそ思ひつるに、かくおはしあひたること、契深くあはれにもありけるかな。」と息の下に言へば、僧都のいはく、「念佛は申し給ふか。」と。母君「心には申さむと思へど、力なきに合はせて勸むる人のなきなり。」と言ふ。僧都「貴きことどもをいひ聞かせつゝ、念佛を勸むれば、母君ねむごろに道心をおこして、念佛を三百遍ばかり唱ふる程に、曉方になりて消入るやうにて失せぬ。僧都のいはく、「われ來らざらましかば、母君の臨終はかくはなからまし。われ親子の機縁深くして、來り逢うて念佛を勧め、道心をおこして、念佛を唱へて失せ給ひぬれば、往生は疑なし。況や、われをひじりの道に勧め入れ給へる志によりて、かく終りは貴くて失せ給ふなり。されば、親は子のため、子は親のために、かぎりなかりける善知識かな。」と言ひてぞ、僧都涙を流して泣きける。その後七々日の法事を慥かに修し畢へて、弟子引具して横川に

は歸りたりけり。横川のひじりたちもこれを聞きて、あはれなりける親子の契かな。と言ひてぞ泣くく貴びけるとなむ語り傳へたるとや。
(今昔物語集)

一六 去年のしをり

西行

よしのやま去年のしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を
たづねむ
よしのやまやがて出でじとおもふ身を花散りなばと人や
待つらむ

源實朝
源頼朝の子。世に鎌倉右大臣と稱す。萬葉調の歌をよくす。歌集を金槐和歌集といふ。承久元年歿。年二十八。(一八五二—一八七九)

道の邊に清水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまり
つれ
心なき身にもあはれは知られけり鳴たつさはの秋のゆふ
ぐれ
さびしさに堪へたる人のまたもあれないほり並べむ冬の
山里
年たけてまた越ゆべしとおもひきやいのちなりけり小夜
の中山
源 實 朝
山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごころ吾あら
めやも

箱根路を吾こえ來れば伊豆の海やおきの小島に波のよる
見ゆ
大海の磯もとゞろによする波われてくだけてさけて散る
かも
吹く風のすゞしくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は
來にけり
ときにより過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたま
へ
武士の矢竝つくるふ籠手のうへに霞たばしる那須のしのはら

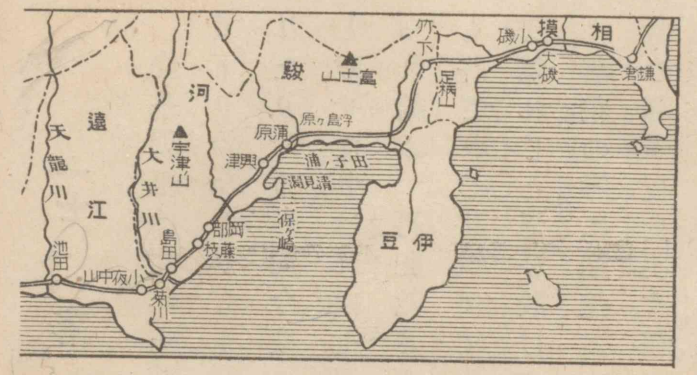
一七 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、専ら陰謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは、法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦著て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寝となればもの憂きに、恩愛の契あさからぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと願みて、思はぬ旅に出で給

俊基朝臣
藤原氏。後醍醐天皇の寵眷を得、藤原資朝と共に興復の謀に参し、事露れ北條高時のために捕へらる。辯疏して漸く解く。後に又僧文觀の陳述によりて再び捕へられ、元弘二年(一九九二)鎌倉にて殺さる。再犯
サイボン。元弘元年七月
交野の春云々
新古今和歌集、藤原俊成の歌に、又やみむ交野のみ野の櫻がり花の雪ちる春の曙し交野は今の大坂府北河内郡にあり。

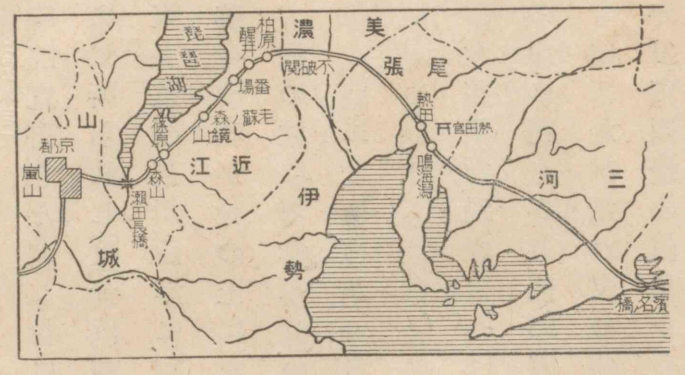
紅葉の錦云々
 拾遺和歌集、藤原公任の歌に、「朝まできば山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」
 逢坂の關云々
 拾遺和歌集、紀貫之の歌に、「あふ坂の關の清水にかけ見えて今やひくらむ望月の駒」
 うねの野云々
 古今和歌集、よみ人知らずの歌に、「近江より朝立ちくればうねの野にたづねぬくなるあけぬこの夜は」
 時雨もいたく云々
 古今和歌集、紀貫之の歌に、「白露も時雨も白葉のころず色づきにけり」
 鏡の山云々
 古今和歌集、大伴黒主の歌に、「鏡山いざ立ちよりにて見に行かむやしぬると」



ふ、心の中ぞ哀れなる。
 憂きをば留めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋打渡り、行き交ふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過行けば、鏡の山はありとも、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、故郷を雲や隔つらむ。番場醒が井柏原、不破の關屋は荒れはてて、猶もる物は秋

68
 34
 30
 3/40
 九〇

汐干に云々
 新古今和歌集、藤原季能の歌に、「さよ千鳥聲こそ近くなるみ湯傾く月に沙やみつらむ」
 命なりけり云々
 新古今和歌集、西行法師の歌に、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」



師が、命なりけりと詠じつ、二たび越えし跡までも、羨しくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇れば、餉まゐらするほ

の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏拜み、汐干に今や鳴海瀉、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀れとゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著き給ふ。
 旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命なりけりと詠じつ、二たび越えし跡までも、羨しくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇れば、餉まゐらするほ

光親卿
吾妻鏡、第二十五に菊川にて中納言宗行の殺されし記事見ゆ。光親卿は作者の思ひ違ひならむ。光親卿は藤原光雅の子。承久の役に、院宣を作り、義時を罪を鳴らし、事破れて捕へられ、駿河加古坂に斬らる。(一八八)
 南陽縣の句
 藤原宗行の作

龜山殿
今の京都市右京區にありし龜山の離宮。

どとて、輿を庭前に舁き止む。轅をたゞきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依りて、光親卿、關東へ召下されしが、此の宿にて斬られし時、昔は南陽縣の菊水下流を汲みて齡を延ぶ。今は東海道の菊川、西岸に宿りて命を終ふ。」と書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀れやいとゞ増りけむ、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川のおなじ流に身をや沈めむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞いて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も今は二たび見ぬ夜の夢と成りぬと思ひ續け給ふ。嶋田藤枝にかかりて、岡邊の眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山邊を越

夢にも人に云々
伊勢物語の歌に、駿河なるうつつの山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり。
 富士の高嶺を云云
新古今和歌集、藤原家隆の歌に、富士の嶺の煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思なりけり。

行けば、葛楓いと茂りて道もなし。昔、業平の中將の住處を求むとて、東の方に下る時、夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や淺き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世を廻る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれど、日數つもれば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

(太平記)

御花の宮に
 是致と五十年同の御花の宮

一八 配所の月

このおとど
 藤原時平。延喜
 九年歿。年三十
 九。(一五三一—
 一五六九)
 菅原のおとど
 菅原道真。延喜
 三年歿。年五十
 九。(一五〇五—
 一五六三)
 ざえ
 心おきて
 よからぬ事
 時平の讒言をい
 ふ。
 昌泰四年
 醍醐天皇の御代
 の年號。(一五六
 一)
 太宰權帥
 太宰府長官の定
 員外の官名。大
 臣左遷の場合に
 は權帥に任ぜら
 る。

醍醐のみかどの御時、このおとど、左大臣の位にて、年いと若くて
 おはしき。菅原のおとど、右大臣の位にておはします。そのをり、
 みかど御年いと若くおはします。左右大臣に、世のまつりごとを
 行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年廿八九ば
 かり、右大臣御年五十七八にやおはしましけむ。共に世のまつり
 ごとをせしめ給ひし程に、右大臣はざえも世にすぐれ、めでたくお
 はしまし、御心おきても、ことのほかにかしこくおはしまし、左大臣
 は御年も若く、才もことのほかに劣り給へるによりて、右大臣御お
 ぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたる程に、
 さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬ事出できて、
 昌泰四年正月廿五日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

あへなむ
 堪へ忍ぶ義より
 轉じて、こらへ
 許す意。
 おほやけ
 かなし

東原

亭子のみかど
 宇多天皇。

このおとどの子どもあまたおはせしに、女君だちはむこどりし、
 男君だちは、皆ほどくにつけて位どもおはせしを、それも皆かた
 がたに流され給ひてかなしきに、幼くおはしける男君女君だち、慕
 ひ泣きておはしければ、小さきはあへなむと、おほやけも許さしめ
 給ひしかば、共にゐて下り給ひしぞかし。みかどの御おきてきは
 めてあやにくにおはしませば、この御子どもを、同じ方にだにか
 はさざりけり。かたぐにいとかなしくおほしめして、御前の梅
 の花を御らむじて、
 こち吹かばにほひおこせよ梅のはなあるじなしとて春な
 わすれそ

又、亭子のみかどに聞えさせ給ふ、
 ながれゆくわれは水層となりはてぬ君しがらみとなりて
 とゞめよ

山崎
今の京都府乙訓
郡。

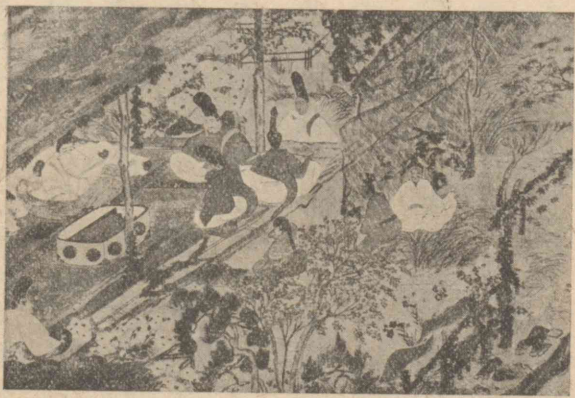
なき事により、かく罪せられ給ふを、辛く思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。その程極めて悲しき事多かり。日頃へて、都遠くなるまゝに心細くおぼされて、

君が住む宿のこずゑをゆくゆ
くも隠るゝまでにかへりみし

はや

又、播磨の國におはしましたつきて、明石の驛うまやといふ處に、御やどりせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へるけしきを御覽じて、作らしめ給へるかろした詩いとかなし。

驛長無驚時レクコトノ變改スルヲ 一榮一落是春秋。



起緣神天野北 公營の所配

明石の驛
兵庫縣明石市に
舊趾あり。

大貳
太宰府の次官。
藤原興範。

かくて筑紫におはしましたつきて、あはれに心細くおぼさるゝ夕べ、をちかたに、處々烟立つを御覽じて、
ゆふされば野にも山にも立つけぶりなげきよりこそもえ
まさりけれ
又、雲の浮きてたゞよふを御覽じても、
山わかれ飛びゆく雲のかへり來るかげ見るときぞなほた
のまるゝ
さりともと、世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、
海ならずたゞよふ水のそこまでも清きこゝろは月ぞ照ら
さむ
これいとかしこくあそばしたりかし。げに、月日こそは照らし給はめとこそはあめれ。
筑紫におはします處の御門も固めておはします。大貳の居ど

ころははるかなれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じや
られけるに、またいと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘のひび
きをきこしめして、つくらせ給へる詩
ぞかし。

都府樓、纔看瓦色、
観音寺、只聽鐘聲。

これは、文集の白居易の、

遺愛寺、鐘欲枕聽、

香爐峰、雪撥簾看。

といふ詩にも、まさざまに作らしめ給
へりところ、昔の博士どもは申しけれ。

かの筑紫にて、九月十日、菊の花を御覽じけるついでに、まだ京にお
はしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、この大臣の



望遠の町府宰太

文集
白氏文集の略。
唐の白樂天の
撰。七十一卷。

まひひま

七言絶句

作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感じ給ひて、御衣賜はせ給
へりしを、筑紫にもてくだらしめ給へりければ、御覽するに、いとゞ
そのをり思しめし出でて作らせ給ひける。

去年、今夜侍、清涼。

恩賜、御衣、今在此。

秋思詩篇、獨斷腸。
捧持、毎日、拜餘香。

この事、いとかしこく人々感じ申されき。

この事ども、たゞちり／＼なるにもあらず、かの筑紫にて作りあ
つめさせ給へりけるを、かきて一卷とせしめ給ひて、後集と名づけ
られたり。又、をり／＼の歌をかきおかせ給へりける、おのづから
世に散り聞えしなり。

また、雨のふる日、うちながめ給ひて、

あめのしたかわけるほどのなれば、やきてし濡衣ひるよ
しもなき、
無實のつよ、けし、時、あ、ま、い。

前集、
後集、
菅家後集。一卷。

北野
今、京都市にあ

北野の宮

北野神社。官幣
中社。今、京都市
上京區馬喰町に
あり。

安樂寺

今の太宰府天満
宮。福岡縣筑紫
郡太宰府町にあ

別當

寺院の長官。

諸司

別當の下にあり
て社務を司るも
の。

大鏡

八卷。文徳天皇
より後一條天皇
まで百七十六年
間の事を記せる
假名文の歴史。
著者未詳。

傳説

やがてかしこにてうせ給へり。
夜のうちに、この北野に、そこらの松をおほさしめ給ひて、渡りす
み給ふをこそは、たゞ今の北野の宮と申して、あら人神におはしま
すめれ。おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこく、あがめ奉り
給ふめり。筑紫のおはしましし處は、安樂寺といひて、おほやけよ
り、別當所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。
かくて、この大臣は、筑紫におはして、延喜三年癸亥三月二十五日
にうせ給ひしぞかし。御年五十九。
(天鏡)
假名文字の史

長柄堤

今の大阪市東淀
川區豊崎町の附
近。

片桐市正且元

豊臣秀吉の臣。
後秀頼の傳とな
る。元和元年(二
二七五)歿。享年
未詳。

木村長門守重成

秀頼に仕へし重
臣。元和元年歿。
年二十一。(二二
五五—二二七七
五)

茨木

大阪府三島郡茨
木町。

寅の刻

現今の午前四
時。
飄々
風の吹くさま。

一九 長柄堤の訣別

人物

片桐市正且元

木村長門守重成

時

慶長十九年の晩秋

所

長柄堤

晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬連りに嘶いて行人出づ。はや分れゆく
横雲や、残んの星を一つづつ、鐘が消しゆくいなめの、長柄堤に秋たけ
て、一むら蘆に風黒く、ありあけすごき淀川水、行きて歸らぬ浪の音、狭霧
にむせび白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀れはいとまざるらん。片桐
市正且元は、居城茨木へ立退かんと、従ふ郎黨一百餘人、寅の刻に邸を立
つて、大阪城をあとになし、列を正してしづくと、長柄堤にさしかゝる。
入りがたの月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏
し、遠方に、おぼろくとあらはるゝ、名に大阪の四衢八街、悄然として寂

南山不落

南山の永遠に崩壊することなきが如く、堅固にして落城せずとの意(南山は支那の名山)

故殿下

豊臣秀吉。殿下の稱は、昔は攝政關白にも用ひたり。

加藤肥州

加藤清正。少時より秀吉に従ひて戦功あり。後、肥後守に任ぜらる。慶長十六年(一六〇九)五月(二二)に亡す。

阿附黨同

阿附はへつらひつくこと。黨同は腹を合はせて徒黨を結ぶこと。相闘ぐアヒセメぐ。

しげに、一棟高く聳えしは、

片お、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、取分け加藤肥州逝去の後には、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相闘げば、大政所の御方さへ、當家を餘處にみそなはし、浮世はなれし御有様。脣齒已に亡ぶ。今にもあれ、事起らば金城湯池もその甲斐なく、

いひかけて聲くもらせ、

片須彌より重き御遺命、夢いさ、かも忘れざれど、御運の末か情なや、この且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧遮那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに

大政所

オホマンドコロ。攝政。關白の母をいふ。こゝにては秀吉の妻。秀吉の歿後、出家して稱臺院。湖月尼と稱す。寛永元年(一六二四)九月(二二)に亡す。

脣齒已に亡ぶ

左傳に「脣亡齒寒」。入口の部分の先づ亡びたるをいふ。

金城湯池

城池の堅固なるをいふ。

須彌

須彌山の略。

千姫

徳川秀忠の長女。慶長八年(一六〇三)秀頼に嫁す。

毘盧遮那佛

ビルシヤナブツ。こゝにては京都方廣寺の大佛をさす。慶長十五年(一六〇八)秀頼再建す。

康かれと、祝ひし文字がもととなり、降つて沸いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕宜となつたること、御運の末とはいひながら、
こらへず馬より跳び下り、かなたに向ひ平伏なし、

片これしかしながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罨にかゝり、仰せつけられし御遺命に、背き奉るけふの仕合せ。不忠とも言ふ甲斐なしとも思し召さん。それを思へば、且元がこの腸はちぎるるばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御詫仕らん。お許しなされて下さりませ。」



城 阪 大

難題

京都方廣寺大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字あり。家康これを以て、己を呪咄するものとして難ず。姑息因循コソクインジュン。

畏にかゝる不覺の涙汗馬

社稷

シヤシヨク。

在すが如く兩手をつき、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、稍あつて心附き、

片あゝ我ながら不覺の至り。わが大罪の御詫よりも、さしかゝるお家の安危。長門守には如何にせし。心許なきことどもぢやなあ。

すかし眺むる折こそあれ。遙かに聞ゆる蹄の音。ほどもあらせず只一騎残霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成。

木市正殿に候な。

片長門殿待ちかねしぞ。

云ふ間に驅寄る轡づら、右手におりたち顔見合はせ、言葉はなくてそゝろにも、まづ袖ぬるゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを、長柄堤に停むらん。

木もはや豊臣の御社稷も、いよゝゝ末となつたるか。棟梁と頼む

讒者

ザンシヤ。

御母公

秀頼の生母淀君。

織田入道

織田信雄常眞入道。信長の次子。秀吉に従ふ。寛永七年歿。年七十三。(二二一八—二二九〇) 大野 大野修理亮治長。 渡邊 渡邊内藏介糾。

足下まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。それがし圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の其の間に、思ひがけぬ珍變あり。續いて足下に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日ごろに似氣なく、激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は掛けしが、貴殿が日ごろの教訓を、思ひ出して無念を忍び、冤と知つて忠臣を救ひ得ざりしいふ甲斐なさ。

悔むを且元押宥め、

片いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申しし如く、お家の大仇は彼等にあらず、鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあら

破綻
ハタン。
治定
ヂヂヤウ。必定
に同じ。きまり
きつたる事。

眞田安房守
名は昌幸。關が
原の役に大阪方
として功あり。
役後九度山に放
たる。慶長十三
年歿。年六十五。
(二二〇四―二
二六八)

幸村
昌幸の次子。父
と共に九度山に
隠れ、後、大阪の
役に秀頼の召に
應じて大阪に赴
き、奇計を以て
屢、東軍を破る。
夏の陣に奮戦
し、遂に戦死す。
年四十六。
長曾我部盛親
元親の第四子。
土佐の役に大關
方が原の役に大
都に封を失ひ、京
元(二二七五)
歿。
黒田家
筑前福岡の城主
黒田長政。
後藤又兵衛
長政に仕へ、屢
戦功あり。後、長
政の秀頼に好か
らざるを知り、
辭して浪人とな
る。秀頼に招か
れ、大阪に入り、
夏の陣に戦死
す。

じ。某とても此の一條遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至り。大切なるはお家の後事。それがし退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、きのふまでは去就を定めざりし織田殿已に心を變じ、京表へ退身せられしかば、城内の秘密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は只ひとへに、籠城の計畫こそ肝要なれ。

木して、籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。
片されば今御城に兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛將、勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一の備をなし置きたり。

木してその智謀の將とは。
片今、九度山に隠れ忍ぶ、信州上田、前の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師。關が原の

一戦以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の様を窺ひ居るを、先年お身方となし置いたり。事起らば、上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戦の進退は、一切彼の人に任せられよ。その他關が原の一亂以來、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみはつけ置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配りなり。

木して又、籠城となつたる曉、敵を防がん手配りは。
片その儀もかねて地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木あまた伐り出させ、商業の爲と偽り、紀の川の川上より、浪速津に押流させ、御船入に積みおいたり。まつた港口の御庫には、年ごろ努めて購ひおきたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。

紀の川

奈良縣南部の山中に發し、西流して海に注ぐ。

兵具

ヒヤウダ。

老奸雄

徳川家康をさす。

速水

速水守久。

御宿

御宿正倫。

和久

和久宗是。三人何れも木村重成の家臣。

千變萬化

金石も云々。

熱心ならば、如何なることも成就する意。朱子の語に「陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成」とあるによる。

木それに加へて、故殿下が貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、なほ若干の餘財あり。

片甲冑兵具も乏しからず。

木城は名に負ふ南山不落。

片眞田・後藤の智勇をもつて、此の堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、ひとへに君家を守護するときば、

木たとひ關東の老奸雄、利をくらはせ、諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻め寄すとも、

片なか／＼三年四年がほどには、攻め落さんこと難かるべし。

木まつた若年には候へども、いよ／＼軍はじまりなば、われまた一方を承り、速水御宿和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹飄さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利

慾に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。此の上は仰せに従ひ、此の事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ、市正殿。

片ほ、頼もしく。唯大切なるは上下の一致。必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら往時に照らし、成行く末を鑑みれば、

木淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野渡邊、

片上、御發明にわたらせらるれど、

木讒佞これを蔽ふがゆゑ、

片地の利はあれども、人の和なく、

木故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、

片天の時にや大御所のおのづからなる徳風に、いつしか靡く世の有様、

木如何なればかくまでに、御運傾く西天の、

社鼠

君側に侍する姦臣。

大御所

徳川家康をさす。

片有明の影のうすれつゝ、
 木東天紅と八面に、かしましく鳴くくだけかけは、
 片新日東天に昇るといふ、
 木世の成行の、
 二人影なるか。

是非もなき世の有様と、入るかたの月眺め入りしはしは愚癡にをちか
 た寺耳驚かす鐘の聲、夜はほのくゝと明けにけり。

(坪内逍遙一桐一葉)

草は山吹、藤かきつばたまでしこ。池には蓮。秋の草は荻、薄桔梗、萩、女郎
 郎花、藤袴、紫苑、われもかう刈萱、龍膽、菊、黄菊も。葛葛朝顔、いづれもいと
 高からず、さゝやかなる垣に繁からぬよし。この外世に稀なるもの、唐
 めきたる名の聞きにくく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。お
 ほかた何もめづらしくありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるも
 のなり。さやうのもの、なくてありなむ。

(吉田兼好一徒然草)

愚癡にをちかた
 寺
 坪内逍遙
 名は雄藏。文學
 博士。元早稻田
 大學名譽教授。
 昭和十年歿。年
 七十七。

110 道義の氣魄

曾て獨逸の哲人フイヒテは、ナポレオンの爲に祖國が滅亡に瀕
 した時、慨然としてその同胞に告げて、獨逸滅亡の眞の原因は、獨逸
 人自身の利己心に外ならない、一切の墮落の根源なる利己心が極
 度に發達して、全獨逸人の生活の唯一の衝動となるに及んで、獨逸
 は自滅の境に墜ちたのであると論じた。これは實に驚くべき卓
 見である。凡そ時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、社會紛亂の
 原因は、一に利己心の増長による。我が國に於て最も恐るべき紛
 亂としては、前後百年に互る戰國時代を挙げなければならぬの
 であるが、その戰國時代の發端は應仁の大亂であり、應仁の大亂は
 解決する事なくして、そのまゝ引續いて戰國亂世となつたのであ
 る。而してその應仁の大亂の原因を、いみじくも喝破したものは

フイヒテ
 Johann
 Gottlieb
 Fichte
 ドイツの哲學
 者。(一七六二—
 一八一四)
 ナポレオン
 Napoleon
 Bonaparte
 フランス皇帝。
 (一七六九—一
 八二一)
 衝動
 目的なき、他より
 作甲する、そのは
 なく、まはなる、
 して、何あす。

應仁の亂
 後土御門天皇の
 御代京師に起り
 し戰亂。

應仁記

三卷。後土御門天皇の御代、細川・山名兩氏の争の事蹟を記したるもの。著者未詳。

瑞相

こゝでは、前兆の意。

大營

タイエイ。大きい經營。

夏

支那古代の國號の一。

桀王

夏の十七世の王。暴虐を以て知らる。

此ノ日イツカ亡

書經に、「時日曷喪。子及汝皆亡」とあり。

高氏

足利尊氏。本課の筆者はこの字を用ひたり。

應仁記である。曰く、

加之大亂ノ起ルベキ瑞相ニヤ、公衆武家共ニ大ニ侈リ、都鄙遠境ノ人民マデ華麗ヲ好ミ、諸家ノ大營、萬民ノ弊、言語道斷ナリ。是ニ依リテ萬民憂悲苦惱シテ、夏ノ民ガ桀王ノ妄惡ヲ恨ンデ、此ノ日イツカ亡ビン。我汝ト俱ニ亡ビン。」ト謳ヒシガ如シ。若シ此ノ時忠臣アラバ、ナドカ之ヲ諫メ奉ラザランヤ。然レドモ唯天下ハ破ルレバ破レヨ、世間ハ滅ビバ滅ビヨ、人ハトモアレ、我ガ身サヘ富貴ナラバ、他ヨリ一段榮耀ニ振舞ハント成行ケリ。

即ち應仁大亂の原因も、亦私利私慾を恣にする心、利己心の跳梁に外ならなかつたのである。古人が「利は誠に亂の始めなり。」といつたのは、誠に名言であるといはなければならぬ。

而して高氏自らは何を理想としたか。足利氏は先祖以來、代々

今川了俊

名は貞世。足利義詮に従ふ。歿年未詳。

難太平記

一卷。主として今川一家祖先以來の事蹟を記したるもの。今川了俊の著。

延元三年

後醍醐天皇の御代。(一九九八)

菊池武重

吉野朝の勤王家。肥後(熊本縣)の人。菊池武時の長子。

聖護寺

肥後(熊本縣)菊池郡龍門村にその寺址あり。

天下の政權を執る事を理想とし、以て高氏に到つた事、今川了俊の難太平記に明記するところである。「七代のうちに生れ變つて天下を取るべし。」と發願し、「我が命をつめて三代のうちに天下をとらしめ給へ。」と腹を切つた先祖の、その發願に應じて現れたのが高氏であつたのである。是を純忠の家、たとへば菊池氏の精神と對照して見ると、どうであらうか。延元三年三月二十七日、菊池武重が土地を聖護寺に寄進して祈つた所は實に左の通りであつた。

伏して願はくは、佛祖加被護念し給ひて、家門久しく盛んに、子孫貞心にして、武略を守りて、長く本朝の鎮將たらん。依りて忠を朝家に致して、正法を護持し奉らん爲に、寄進狀件の如し。

足利の發願と、菊池氏の起請と、之を對比するに、天地の懸隔、黑白の相反、殆ど世界を異にする人なるを見る。然り、足利は利の世界

に住む者である。而して菊池氏は義の世界に住する者である。ひとり足利氏のみでなく、足利氏の興黨はすべて、これ利の世界の住人であつた。ひとり菊池氏のみでなく、楠木・新田・名和・結城等の諸家は、いづれも義の世界に住んだ人々であつた。

大なるかな、義利の相隔つる。義に據る人と、利を求める者とは、たとへその蹈む土は相連なるとも、其の安んずる境涯は全く異なつてゐるのである。延元・興國・正平の際、天下の紛亂を以て單なる勢力の争と觀てはならない。それは實に義と利との戦であつた。私利と道義との決戦であつたのである。疑ふ者は見よ。兩者の態度の相違は、明瞭にその外交の上に現れてゐる。後醍醐天皇の皇子、征西將軍宮懷良親王は、明國が、新興の勢ひに乗じて我が國に入寇せんとし、先づ書を以て威嚇し來るや、毅然として之に對して、汝に興戰の策あらば、我に禦敵の圖あり。汝もし股肱の將

興國

後村上天皇の御代の年號。(二〇〇〇—二〇〇五)

正平

後村上・長慶天皇の御代の年號。(二〇〇六—二〇二九)

後醍醐天皇

第九十六代の天皇

懷良親王

カネナガシンワウ。後醍醐天皇の皇子。

賀蘭山

ガランザン。支那の北東部に在る山脈。

蒙古の轍云々

後宇多天皇の御代、蒙古族より出でし元王忽必烈が文永十一年と弘安四年とに兵を率ゐて來寇し兩度共失敗せしことをさす。

を選び、精銳の師を起し、來つて我が境を侵すとも、水澤の地、山海の洲、自ら其の備あり、豈肯へて途に跪いて之を奉ぜむや。賀蘭山前に相逢うて聊か以て博戯せむ。我何ぞ懼れむや。もし汝勝ちて、我負けなば暫く汝の意を満さむ。もし我勝ちて、汝負けなば、却りて汝が邦の羞たるべし。と答へ給うた。明主是を見て怒る事甚しかつたが、終に蒙古の轍に鑑み、兵を加へなかつたとは明史の傳ふる所である。蓋し、親王の御氣魄にうたれてしまつたのであらう。當時、親王の勢力は、之を兵數や財力からいへば、僅かに九州の一角に據つて逆賊と苦戦の最中であり、之を新興の明國にくらべてもとより問題にはならないのであるが、深く國體を信じ、固く大義を守らせられる精神から、この凜然犯すべからざる威嚴が發現したのである。義に據る魂の威力である。之に反して、足利氏はどうか。足利高氏の子孫

義政
足利六代將軍。
延徳二年歿。年
五十六。(二〇九
五—二一五〇)
文明十五年
後土御門天皇の
御代。(二一四
三)
成化十九年
明の憲宗の年
號。

義政は將軍として天下の政權を執る身でありながら、文明十五年、明國に書を送るに、彼に媚びて成化十九年の年號を用ひ、彼に諛ひて臣と稱し、頻りに叩頭して乞うて曰く、

抑、弊邑久しく焚蕩の餘に承け、銅錢地を掃つて盡き、官庫空
虚なり、何を以てか民を利せん。今、使者を遣して入朝せし
む、求むる所こゝに在るのみ。聖恩廣大なり。願はくは壹
拾萬貫を得て、以て其の求むる所を滿さば、則ち賜、是より大
なるはなし。

これ、路邊に叩頭し、手を擦りて、一文半錢のあはれみを乞ふ者と何の異なる所かある。利に生きる者の悲哀である。而してこれ實に、彼の足利高氏が、遠くその祖先から承けて、長くその子孫に傳へた功利私慾の醜態に外ならないのである。世のあやまつて高氏を讚美する者、眼を開いて此の事實を諦視せよ。(平泉澄 建武中興の本義)

平泉澄
文學博士。國史
學者。東京帝國
大學教授。

二一 海外發展の要諦

肇國以來、悠久たる年月を送り迎へて、特殊なる地理を背景とし、特殊なる文明の綾を織成し、特殊なる生活劇を演じ來れるもの、これ我が日本民族である。實に我が日本民族は、その特殊なる背景の前に展開した萬古不易の國體と、東西無比の民族性とをもつてゐる。のみならず、纏ては世界的大發展を遂げんとする潑刺たる意氣と雄圖とを抱いてゐる。併しながら、絶海の孤島に生ひ立ちたるが爲に、日本民族は、鉢植の公孫樹に類するものがある。亭々として蒼穹を摩すべき偉大なる素質を有しながら、根柢を一杯の土に托しゐる身の悲しさに、思ふさま根を伸ばし枝を張り得ざる公孫樹の姿は、是やがて日本民族の現下の姿ではあるまいか。日本民族をこの狭い天地より救ひ出して、世界的沃野に移し植

蒼穹を摩す

ゑんとするもの、即ち予が海外發展論の本旨である。言換へれば、第一次には我が國を世界の日本となし、第二次には世界を日本の世界となすべき使命を遂げること、是ぞ我々日本民族の理想であり、大精神であらねばならぬ。

我が皇室が日本民族の總本家として、悠久無比なるは、猶公孫樹が前世界より稀に残存する名木にして、たゞ我が日本に於てのみ生長發育するが如く、眞に歴史上の奇蹟的美觀である。我々は是非ともこの世界の名木を以て自任し、我々日本民族を廣き地球上に繁茂せしむることを使命としてゐることを覺悟しなければならぬ。併しながら、世界は沃野で、天然及び人爲の肥料に富むと共に、また種々の瘴癘あり、災害あることを忘れてはならぬ。是等の災害に打勝つて、自己の生命を培ひ育てるには、非常の努力を必要とする。即ち我々は、世界の文明を吸収して、日本特有の文化に

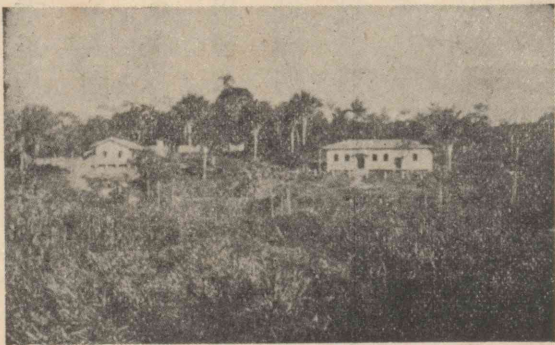
瘴癘
シャウレイ。山
川の毒にあたり
て起る病氣。

科學の彩雲

頽廢的

資せんとするに當つて、營養物の良否を選り分ける識見、絶えず外より襲ひ來る災害に抵抗する彈力を持たなければ、自ら文明病に罹ることを免れない。されば日本民族をして、この職能と抵抗力とを得しめることが第一の急務である。

今や我々日本民族の脚下には、一碧萬頃
の物質文明の沃野が開けてゐる。そして
是を包むに、近代的の空氣と、科學の彩雲を
以てしてゐる。所謂近代文明の我々を衝
動する刺戟は華美であり、壯麗である。併
しながら、その華美壯麗は、極めて刹那的に
は強く我々の眼を刺戟するけれども、久しきにわたれば寧ろ内容
の空虚に一種の寂しさ物足りなさを覺えしめるものである。こ



校學小人本日るけ於にルジラフ

れ近代文明は不自然にして不具なるが爲であり、内部の要求と外部の生活とが調和を缺いてゐるが爲である。

是等一切の不自然にして不健全なる要素が相合して、毒酒の如き世紀末の頹廢思潮を醸成した。けれども人間の生命力は、岩を裂く急湍よりも猶熾烈に、猶弾力に富んでゐる。生命の伸びんとする要求は、何物の障害をも突破して、その芽をふき根を張らずにはゐない。自然の伸張を妨げる一切の虚偽、一切の假面を擺脱せんとする努力、その結果は絶えず争闘を續け、優勝劣敗の活劇となるのは、生物界の原則である。

かの世界大戦は、これを内部的に解すれば、人間生命の活火が、虚偽の文明、虚偽の平和、虚偽の結合、虚偽の妥協を破壊せんとして爆發したものである。即ち生命を失へる舊き文明を破壊して最も自然なる、最も健全なる、新しき文明を創造せんとする産みの苦し

急湍
キフタン。
熾烈
シレッ。
擺脱
ハイダッ。のぞく。

トライテュケ
ドイツの史家・
政論家。(一八三
四—一八九六)

み、それが即ち世界大戦である。故に世界大戦は、既に生命を失ふべき十九世紀の老朽文明に最後の止めを刺し、將に現れんとする二十世紀の新鮮なる文明の大誕生を助けんとしたものである。従つて世界大戦の終結と共に、世界の思想に一大廻轉を來したことは、甚だ自然のことである。古來「戦争は事物の母なり」といふ諺がある。トライテュケが「永久的平和を夢みて遊惰に傾く國民は、疲弊困憊せる癡者なり」と言つたのは、文明病に罹れる國家の運命を痛快に豫告したものである。戦争は、これが外科的療治として卓効ある大手術、大淘汰に外ならぬ。次いで來るべきものは、新生命の發見である。廢頹的舊思想の革新である。この時に際して、我が大和民族は果して如何なる覺悟を持たなければならぬか。世界に民族の數多しと雖も、日本民族ほど世界に無比な民族はないのである。皇室と國民との關係が、義は君臣にして情は即ち

沈湎
チンメン。

色讀
文字通りに意味
を解し、その眞
意をかへりみざ
ること。

父子の如き状態にあること、驚くべき生々發展力を有する同化的進取的國民であるといふこと、是等の事實のみにても、世界何處の民族にもその匹敵あるを知らない。我々はこの世界に冠絶せる民族精神を益、大ならしめ、益、有意義たらしめ、日本民族の理想の實現に努力しなければならぬ。偏に頽廢せる歐米文物の吸収にのみ沈湎して、自己を忘れたる無自覺なる摸倣をなし、彼に同化せられる方向に歩むのみであつてはならない。我は飽くまでも主にして、彼は飽くまでも従でなければならぬが、偏狹なる排外主義的愛國論と、所謂民族的自覺とは別のものである。我々は再び日本民族を學び、日本民族の偉大性を色讀しなければならぬ。そこに我等の無窮の生命があり、生々不死の發展がある。日本は貧乏である。富の程度に於て、物質的生産力に於て、遙かに西洋に及ばないことは確かに現在の事實である。けれども、若

遵奉
ジユンボウ。

ウキルヘルム三世
プロシア王。(一七七〇—一八四〇)

御宸翰
明治元年三月十四日發布の御宸翰の一部。

し日本人にして生々發展の元氣を有し、民族的團結力を有し、堅實な道義心を有し、鞏固な國家的觀念を有し、民族固有の精神、建國の本義を遵奉し、體得してゐるならば、敢へて深くそれ等の物質的方面の缺乏を悲觀する必要はない。予の憂へるところは、我が國粹の滅亡、大和魂の頽廢である。この患さへないならば、他の一切は固より第二第三の問題であつて、多く問ふを要しない。嘗てウキルヘルム三世が、國歩の艱難に際して下したる勅語には、次の語が見えてゐる。曰く、
「國家は、その有形的の力に失ひたる所を補充するに、精神的の力を以てせざるべからず」と。日本民族が益、進んで世界的の大民族たらんとするには、先づ何よりも重大なる要件として、國民の一人一人が、孰れも鞏固なる國家的精神を抱き、民族的自覺の眼を覺さなければならぬ。畏多くも、明治天皇の御宸翰の中には、

朕茲ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ 列祖ノ御偉業ヲ繼述シ一身
ノ艱難辛苦ヲ問ス親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ
萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キ
ニ置ン事ヲ欲ス

とある。萬里の波濤を開拓し、國威を四方に宣布することは、明治
天皇の世界的氣魄を示されたもので、固より建國の精神を一層明
快に現代的に述べさせられたものに外ならない。

かくの如き勃々たる世界雄飛の思想、膨脹發展の思想は、嘗に御
歴代の天皇の大御心の中に宿つてゐたばかりではなく、日本民族
全體の血管の中に常に涌立ち、絶えず脈打つてゐたことを忘れて
はならない。その民族的精神が現れて、或は桃太郎の鬼が島退治
の童話となり、實際には神功皇后の三韓の役となり、倭寇となり、豊
太閤の朝鮮の役となり、或は日清戦争となり、日露戦争となり、朝鮮

歴大
バウダイ。

の合併となつたのである。我々は悉くこの志を以て、相團結し、相
協力して、民族的大精神、我が國粹の發揚に全力を傾倒したならば、
國家の隆々として世界に光被し發展すべきは疑念を容れない。

現代に於ける列國の情勢を觀るに、獨逸は、その協同統治者とし
てのユダヤ人を排斥し、民族的實力に於て徹底的に威を振ひ、物心
兩面を支配せんとする抱負を示してゐるが、これに對して、英國は
今や世界的膨脹の極度に達し、爛熟正にその度を過ぎてゐるかの
感がある。露國はその歴大なる土地と人口とを以てし、却つてそ
の大なるに累せられ、内在的破壊力の熾烈なるに禍せられて、十分
に世界政策に意を用ふるの實力を缺いてゐる。佛國は今日既に
その進取的な發展力を消耗したやうな有様で、世界的民族競争の
第一線に立つて活躍するには、大なる國民的努力が必要であらう。
列國の情勢既にかくの如くである。我等は斷じて躊躇逡巡すべ

偷安逸樂

トウアンイッラ
ク。目前の樂を
食るをいふ。

後藤新平

伯爵。政治家。
岩手縣の人。昭
和四年歿。年七
十三。

燕村

俳人。畫家。天
明調俳句の開拓
者として名あ
り。

き時ではない。偷安逸樂を貪るべき時ではない。益、その膨脹力
を鼓し、開國進取の旗を押立てて勇猛邁進すべき時である。我が
國固有の民族精神、生々發展の氣概、道義的健闘の雄志、強大なる同
化力を奮ひ起して、我が理想を發揮し、我が意氣を試むべき時であ
る。

(後藤新平―後藤伯爵國民訓)

二二 天明調

春の海ひねもすのたりのたりかな

燕村

菜の花や月は東に日は西に

牡丹散つてうち重なりぬ二三片

涼しさや鐘をはなるゝ鐘の聲

四五人に月落ちかゝる踊かな

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

化けさうな傘かす寺の時雨かな

楠の根をしづかに濡らす時雨かな

易水にねぶか流るゝ寒さかな

藪入の寝るや一人の親の側

太祇

橋落ちて人岸にあり夏の月

犬にうつ石のさて無し冬の月

太祇

炭氏。俳人。江
戸の人。安永三
年歿。年五十六。
(二三七九―二
四三四)

曉臺

加藤氏。俳人。
名古屋の人。寛政四年歿。年六十一。(二三九二—二四五二)

關更

高桑氏。俳人。
金澤の人。寛政十一年歿。年七十三。(二三八七—二四五九)

几董

高井氏。俳人。
寛政元年歿。年四十九。(二四〇一—二四四九)

召波

黒柳氏。俳人。
京都の人。明和八年(一四三一)歿。享年未詳。

日暮れたり三井寺くだる春の人

曉臺

梅早し蠣わる家の日なたむき

白牡丹たゞ一輪の盛りかな

關更

枯葦の日に日に折れて流れけり

まさご路やかげろふを追ふ波頭

几董

貫之が船の灯による千鳥かな

白壁に蜻蛉過ぐる日影かな

召波

郊外に酒屋の倉や冬木立

二三 世界の四聖

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせん。釋迦孔子ソクラテス基督の四人世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度迦毘羅城の王家に生る。父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多と云ふ。釋迦は迦毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。身は一國の太子に生れたれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、天空の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘にして跋提河の邊に歿しぬ。

一代の宗師
百世の儀表
迦毘羅城
カピラジャウ。
古代中印度にありし王國の都城。
淨飯王
ジャウボンツウ。
迦毘羅國の王。
摩耶夫人
摩訶摩耶。淨飯王の妃。
佛陀
ブツダ。梵語。智者の意。
正覺
ジャウガク。大悟。
徹底
天竺
印度の古名。

名教
聖人の教。

蹠
サタ。つまづき
て進まざるさ
ま。

子貢

孔門十哲の一
人。衛の人。
天を怨みず云々
史記孔子世家
に出づ

雅典

アテネ。古代希
臘アツチカ州の
首都

詭辯學派

ソフィストの
譯。西紀前第五
世紀の後半に、
一時希臘に勢力
ありし哲學者の
一派。その始祖
をプロタゴラ
スといふ。

跋扈

れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て、已むを得ず、老脚蹠として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼わが道遂に窮す。世遂に我を知る者なきか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知る者なからんや」と。孔子對へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えんや」と。幾ばくもなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテスは希臘の雅典に住める一彫刻師の子なりき。その生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つること八九十年なり。東西の聖人、殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は、所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争にとゞまり、道德は空文の上のみ尙ばれたり。其の状、なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社

侃諤

カンガク。剛直
にして言を曲げ
ざるこゝ。

喬木は風に折ら
る

讒訴

ザンソ。

傲岸不遜

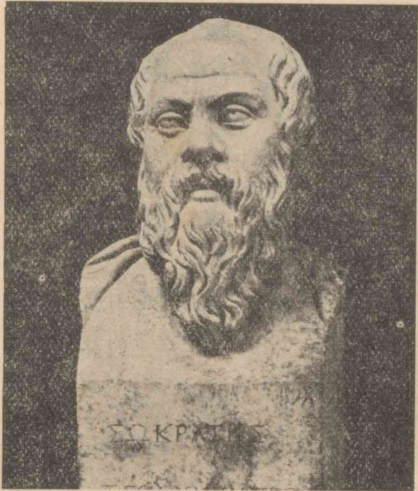
ガウガンフソ
ン。尊大にして
人に屈せずへり
くだらざるこ
と。

會の實際に關して、殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て、辯難攻撃して一步も假借せず、侃諤の正義、その稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。

然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざる者相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものなりき。慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰

従容

アスクレピオス
醫術の神。



ソクラテス

く「命のみ」と。その獄中にあるや、常にその門弟子を集めて、生死・靈魂未來のことを説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや」と。終に従容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一鶏を以てアスクレピオスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは、此の如くにして逝きぬ。年七十。

基督は、本名を耶蘇といふ。基督は「膏灌がれたる者」といふ義に

ベテレヘム
イエルサレムの南方の一小村。
ヨセフ
ユダヤ人ナタンの子。
マリヤ
ヨセフの妻。ベテレヘムの旅舎に於て耶蘇を産む。
豫言者
神の名によりて未來を語る者。
ヨハネ
洗禮者と稱せらる。基督の先驅者。
福音
フクイン。世人に光明幸福を與ふる神諭。
胚胎
ハイタイ。きざすこと。事物の起原。
收斂
シウレン。苛酷なる租税をとりたつること。

して、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベテレヘムに生る。その生後四年を以て、西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べるいやしき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑、當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して、益放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し、形式に拘泥して空しく人を惑はすのみ。茲に於て、一世の人心は缺焉として、偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら「救世の使命を負へる神の子」と稱し、昂

缺焉
ケツエン。物足
らざるさま。

磔殺の刑

晏然

アンゼン。

神よ云々

路加傳第二十三
章三十四節に見
えたる言葉。
イエルサレム云

同二十八節にあ
る言葉。イエル
サレムは猶太の
首府。

轅軻不遇
カンカフダウ。

然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等これを喜ばず。以て猥りに新法異説を唱へて、民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處せり。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ彼等を許せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「イエルサレムの女子よ、我がために哭くことなかれ。唯己と己の子とのために哭け。」と。かくの如くして、基督が三十三年の短き生涯は、十字架上の露と消去りぬ。基督の死後、その弟子等は、激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘めぬ。基督教即ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の内、釋迦を除いては、いづれも轅軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に

經綸
ケイリン。

揚言

得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。悲惨なりといふべし。然れども、これらの人々の志す所は、天下後世にありて、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つて「わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えん」と嗟歎せり。釋迦は衆生のためにその妻子と王位とを抛ちて食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、「正義を信ずる者に取りて、死はた何爲るものぞ。我をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷を覺さざるべからず。」と。基督は己を罪に陥るゝ者のために神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

煩惱
ボンナウ。欲情
のわづらひ。
涅槃
ネハン。梵語。
迷ひを脱して眞
理を得る義。

我の一念
自己に執著する
妄念。

身を修め云々
大學に、古之
欲明^ミ、明德^ト於
天下^ニ者、先治^ス
其國^ヲ、欲^ス治^ス
其國^ヲ者、先齊^ス
其家^ヲ、欲^ス齊^ス
其家^ヲ者、先修^ス
其身^ヲ、欲^ス修^ス
其身^ヲ者、先正^ス
其心^ヲ、欲^ス正^ス
其心^ヲ者、先誠^ス
其意^ヲ。とあるに
よる。
孝は百行の本
古文孝經の序に
あり。

四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にも、また多少の差違なきを得ず。今その要を擧ぐれば左の如し。釋迦の教理は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は、我の一念に執著するにあり。故に吾人は、我の一念を脱却して無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育

知徳合一

山上の垂訓

馬太傳第五章より第七章に互りて出づ。基督が山上にて説きたる教訓。

を受けて、身既に修まらば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治まらべく、國治まらば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。
ソクラテスの教は、所謂知徳合一説なり。おもへらく、眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとは、もと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義自らその中にあり。正義は靈魂の満足なり。靈魂は肉體と異りて、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども富貴は道德の中に在りと。
基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年間の傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、心

の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見ることを得べければなり。惡に敵するなかれ、人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義をその前に行ふなかれ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。偽善者の行に倣ふなかれ。隠れたるをみ給ふ神は、あらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞおのが目にある梁木を見ざるや。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩けよ、然らば啓かれ

梁木
うつぱり。

ん。窄き門より入れ。沈淪ほろびに至る門はその路大きく、これに入る者は多し。嗚呼、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るものの少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるは、砂上に屋を建つる愚人の如し」と。基督教の精髓は、實にこの山上の垂訓に存す。

此の如きは、四聖の傳記、及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今尙凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に依りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なる、それ何を以てかこれに比せんや。

(高山樗牛—樗牛全集)

凛々
リンリン。

二四 茶 味

一

茶道の精神を簡単に言ひ盡す言葉は「和敬清寂」の四字である。

この四字が尊重せられつゝ傳はつたことは、貴いことであり、又嬉しいことである。この四字を換言すれば、能和能敬、能清能寂の四綱領となる。

和は、和合の和、調和の和、和樂の和である。「禮の用は和を貴しとなす。」人相我相に役せられ、知るに傲り知らざるを辱しむるやうな人は、人として人に交はる資格がない。併し、如何に和が貴いといつても、和だけでは狎れ易い嫌ひがあるので、これを攝するに敬を以てせねばならぬ。敬とは、自己に對しては慎み、他人に對しては敬ふといふ心持で、程子の所謂主一無適、即ち專念である。そし

禮の用は云々
論語に、有子曰、
禮之用、和爲貴、
とあるによる。

程子

程明道。宋代の
哲學者。元豐八

年歿。年五十四。

(西曆一〇三二

—一〇八五)

主一無適

シユイツムテ

キ。他念を雜へ

ず心を一所に集

注すること。二

程全書に「程子

曰主一之謂敬、

無適之謂一」と

あるによる。

利休

千宗易と言ふ。

茶人。天正十九

年(二二五)歿。

茶巾

チャキン。茶器

を拭ふ布。

茶筌

チャセン。抹茶

をたつるときか

きまはして泡を

立つるに用ふる

もの。

水屋

ミツヤ。室の片

隅に設けられ、

茶器を備へおく

所。

鎮靜劑

て、それが形に現れたものが儀容である。清はいふ迄もなく清潔清廉の清であり、物と心との清であるが、殊に茶器を扱ふ時の清は、茶味の第一義である。或田舎人が、五兩の金を利休に送つて、茶器の購入を乞うた時に、利休はたゞ茶巾と茶筌ばかりを送つた。白いきれいな茶巾ですつきりと拭はれ、新しい茶筌で茶が點てられた時、入れた器はたとひ古いかけた茶碗でも、それはもはや、かけ茶碗ではないのである。直接客には見えない水屋の働、家庭に於ては臺所勝手元の働に、若しこの清が缺けてゐたならば、どうして眞實の茶味が出て来よう。以上に加へて、心のおちつき、即ち寂が具はるやうになれば、まうし分がなくなるのである。固より茶道は、きのふ屈強の若者もけふは戦場の露と消え、高壯の建物も忽ちにして灰燼に歸する、戦國のはかなくそはくしい時代の氣分に對する鎮靜劑として要求せられ、發達したものであるから、自然に兵

兵馬倥傯

ヘイバコウウン
ウ。兵亂のため
に事のいそがし
きこと。

悠久の自己に悟
入す
一舉手一投足

茶室の精神
と我々の生活の
説明

馬倥傯の間に得らるゝ僅かの暇を利用して、時間を超越した悠久の自己に悟入すべく、その一舉手一投足にも、心のおちつきを宿すことを要求する。これが即ち寂である。この「和敬清寂」の四字を標的として、各自相應の天地を開く所に、茶道の妙味がある。

以上の四綱領は、茶道の大精神である。しかしよく考へると、それは單に茶室裏に限ることではなく、人生萬般の事、皆この四字で律せられる。修行の道場は四疊半でも、活用の舞臺は人生全體に互り、事々物々、念々刻々に通じて、日常生活の



茶室

珠光

村田氏。足利時代に於ける茶人。

一味清淨法喜禪
悦なり

躁し

サワガシ。

精行儉徳

胖か

ユタカ。

茶杓

抹茶をすくひと
る時に用ふる細
く小さき匙。

水指

茶の湯にて、釜
にさす水を入れ
置き茶柄杓にて
汲み出す器。

準據となるわけである。茶道の徳は實に茲に在る。珠光は、義政に答へた言葉の中で「茶は遊に非ず、藝に非ず、又放樂に非ず、一味清淨法喜禪悦なり」といひ、又賓主應接の禮、彼此談論の和、而もその交水の淡きに似て清遊仙の如し」といつてゐる。利休は和ぎて流れず、敬して諂はず、清くして潔く、寂にして躁しうせざれ」といひ、「茶は精行儉徳の人によろし」といつてゐる。この精行儉徳といふ四字は「和敬清寂」の四字を姿に現したやうなものである。

精行とは、行に精しいといふことで、一々の動作に心が籠るの意味である。一舉手一投足は勿論、一器を扱ひ一物を動かすにも、心の奥の鏡にかけて、餘裕のある姿をうつすことである。小さい室をも廣く胖かに住みなし、細く短い茶杓を拭うても、太く長い物を清むると同じ様な心を宿し、軽い羽箆を動かしても、おもやかなる扱ひに心の莊重を現し、重い水指を運んでも、易々として從容の

道念

心を現す。是等の習によつて、この精行が修練されるので、かやうな間に小を小とせず、（小を小とせず、乏しきを乏しとせざる道念が養はれ、事々物物に對して、その所以を知り、その來由を慮り、これに接して法悦歡喜の情、感謝報恩の念を養ふやうになるのである。一粒の飯、一本のマツチも、今我が目前一瞬の用を辨ずる事によつて、この物の一生は終るなりと觀ずれば、決してこれを輕々しく用ひる心が起らぬのみか、このさゝやかなる物に宿る廣大無邊なる自然の力、天地の恩に氣がついて、感謝の生活、知足安分の境遇に入らずには居られなくなる。これが即ち儉徳である。こゝに於ては誇るべき奢りもなければ、愧づべき不及もない。これその位に素して行ひその外を願はざるの境であり、知足の法は即ちこれ富樂安穩の處である。〔和敬清寂の四字に導かれつゝ、精行儉徳の人となる。これが茶道の修であり證である。〕

知足安分の境遇
現在の分限に満足して、心を安んじて食らぬこと。
不及

茶と人との関係

二

感受性
外部の刺激を感じ得る能力。

和敬清寂といひ、精行儉徳といふ、この心身を練る第一歩は感受性を鋭敏ならしむるに在る。その爲には、特に或境地を作つて、そこへひき入れ、それにひたらせ、それを味はし、しめねばならぬ。これが心の教育であり、茶道の修練である。所謂或境地とは、云ふまでもなく茶室のことである。細かい所までよく氣づかしめるには、大きい広い散漫な部屋ではいけない。それは、起居振舞の爲に動く微かな風をも感ずるやうな小室でなければならぬ。珠光は、在來の大きな室を縮めて、始めて四疊半を作つた。心を練るといふ事に氣づく時、これは尤もなことであつたと思ふ。紹鷗は、この古規に則つて四疊半を作り、更に室内の趣を簡略にして、これを草の座敷と稱した。利休は、師の紹鷗と相談して、更にこれを二疊半に縮小した。これは一面に於ては華麗な書院式の裝飾を適用す

紹鷗
武野紹鷗。茶人。利休の師。大阪の人。

書院式の裝飾

る餘地のないやう、知足安分の生活を可能ならしめるやうに工夫したのであらうが、心を練るといふ他面から考へても、かくせねばならなかつたのである。

又茶室を普通北向とし、南の光線を避けて幾らか薄暗い室とするのも、この静の境地を作らんが爲である。かゝる工夫によつて作り上げられた室内で、心を練るに當つて、最も都合よく、又最も重き役目を爲すものは、微かなる感じである。静かなる境地に於て眼・耳・鼻・舌・身・意、六根の微妙なる活動が營まるゝ時、心の世界の未だ嘗て開かれなかつた部分の門が開かれる。その中でも、耳の力が最も強い。主人は客の一舉一動から出る音に心の耳を澄まし、客は主人の働から出る音に心の耳を洗ふ。されば茶には種々の響がある。來著の旨を報ずる板ばんの音は、客が主人の心に響かす第一の響である。これを聞いた主人が、出で迎ふるにあたつて、手水鉢

六根

ロクコン。人間の惑を生ずる六つの根原。即ち眼・耳・鼻・舌・身・意。

心の耳

の水を改めんとて、さつとうつす水の音は、馳走の最初の響である。

露地
南坊録
茶道の書物の名。茶道南坊流の流祖宗啓の記録。

露地の飛石を渡れば下駄の響がする。南坊録に「露地の出入に下駄はくこと、紹鷗以來の定めなり。草木の露深き所を往來する故斯くの如し。樂に杳の音功者不功者を聴き知る」といひ、又「かしがましくなきやうに、又さし足するやうにもなく、おだやかに無心なるが功者と知るべし。得道の人ならでは批判し難し」といつてある。かうなると下駄の音も中々むつかしくなる。併し、これも亦照顧脚下の一で、これによつて、足元に心を置く良習も自ら養はれる。つくばひで手水を使ふ音の清々しさと、手を洗ひ終つて立上がる時に出る下駄の音とは、次客への合圖となるので、唯單に主人へ響かせるだけではない。やがて席入りの爲に戸の音がする。疊ざはりの音は、その人の品位を偲ばせ、更に客自身の心をも落著かせる。客一同が入席し終るまで、その動作から出る響が續いて

照顧脚下

セウコキヤクカ。足もとに氣をつけること。つくばひ庭の手水鉢のすゑてあるところ。

手前
テマへ。茶をた
つる所作。

主人の心に通ふので、水屋に端坐してこれを聞けば、壁を隔てて客の一姿一態を心に見るのみならず、その響によつて客の心持までをも察する事が出来る。又主人が手前の間に工夫して出す種々の響は、皆自然を偲ばせて、微かなる音に深い意味を添へてゐる。即ち茶碗に汲入れる水の音を笥の音にかよはせ、茶筌に谷川のせせらぎを偲ばせ、賤山がつの斧の音をひびかす等、山里の趣を取集めて、静境に幽趣を添へる。

旋律
聲音の抑揚が規則正しく循環すること。

松韻と谿聲
松風の音と谷川の響。

これ等の響の背景として、始終一貫するものは、釜の湯の煮える音である。通常これを松風といつてゐる。この松風は樂音と違ひ、旋律の影響を受けてゐないので、静寂の興趣を一層深からしめ、落著いて聞いてゐると、心を大森林の奥、大幽谷の底までも持つて行つてしまふやうな心地がする。太古の如き静けさの内に、その幽趣を増すものは、松韻と谿聲とである。これを四疊半裡にうつ

してこの趣を偲ばしむるは、實に茶境の力である。かく心耳を澄まし來れば、微かなる感じは、たゞ微かな感じではなくなつて、その微かな感じの彼方に續く、大きな重い意義の世界が開けてくる。

奕堂
エキダウ。奕堂
游庵。曹洞宗管
長。明治十二年
歿。
禪定
ゼンチャウ。心
を一處に集めて
静坐すること。
沙彌
シヤミ。出家し
て修業いまだ熟
せざるものの
稱。

奕堂和尚は、曹洞宗近世の名僧であつたが、一日殷々とひびく曉鐘に心耳を澄まし、禪定から起つて侍僧を召し、鐘撞く者の誰なるかを見させた。侍僧は、それが新參の一小沙彌である旨を報じた。そこで奕堂和尚は、その小沙彌を膝下に招いて、今曉の鐘は如何なる心持で撞いたか。と尋ねられた。沙彌は、別にこれといふ心もなく、たゞ鐘を撞いたばかりであります。と答へたので、いやさうではあるまい、何か心に思つてゐたであらう。鐘つかばかくこそ。誠に貴い響であつたぞ。と云はれて、別にこれといふ心得も御座りませぬが、たゞ國許に居ました時、師匠が鐘をつく時は、鐘を佛と心得て、それに添ふだけの心の慎みを忘れてはならぬと、常々戒めて下

森田悟由

曹洞宗管長。大正四年歿。年八十二。

敬虔の念

つゞみやすう

嗟嘆

されました。それを思ひ浮べて、鐘を佛と敬ひ、禮拜しながら撞いたばかりでござります。」と答へた。奕堂和尚は、しみじみとその心掛に感じ、終生萬事につけて今朝の心を忘れるなよ。」と戒められたといふ。この小沙彌こそは、後年の森田悟由大禪師であつたのである。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさへ、かほどまで敬虔の念をこめた古人の心づかひは、如何にも尊いものではないか。

已に音によつて心が澄みわたつて來ると、心の窓である眼には、眞の趣がうつる。曉の露地では、幽かなる残燈が心を照らす。残燈に心づけよと教へるのは、露地に配合せられたその光の工合であつて、油皿の置き方や、油の残り加減ではない。秀吉が曉の會に招かれて、露地に入つた時、その侍臣を顧みて、あの残燈はいかに。」と云つた。侍臣は燈火かゝげよといふ思召と誤つて、火の加減を變へた。これを見た秀吉は、「はや残燈の趣失せにけり。」と嗟嘆した

心の眼

點茶

茶をたつること。

序破急の呼吸

茶のたて方に、初・中・終の三順序ありて、それぞれ異なる心持ありといふ意。

慇懃の尾籠

インギンのピロウ。丁寧過ぎて反つて無禮になること。

潤澤

ジュンタク。

奥田正造

教育家。東京帝國大學出身。成蹊高等女學校長。岐阜縣の人。明治十七年生。

と云ふ。悲しいかな、侍臣の心の眼が暗かつたのである。

點茶の間、主人の姿に變化があると心づき、また手前は序破急の呼吸があると氣がつくまでに、心眼が開けて來ると、心をこめた主人の飾り方、即ちこれに含ませられた意義を、残る隈なく己が心の鏡にうつすことが出来るやうになり、また一物一體の自らなる位置にも心づき、受取つた物は出されたやうにして返し、拜見の爲取上げた物は、再び元の通りに置く事が、知らず識らずの間に出来るやうになつて來る。又主客相對すべき定座に、主位を奪ひ通ひ口を塞いで、慇懃の尾籠を敢へてするやうなこともなくなつて來る。以上視聽の外、更に鼻には香、舌には味と、それ〴〵六根の修練が加はれば、これによつて養成せられた理智は、ひとり茶味の上に必要なばかりでなく、また人生其の物を潤澤ならしめる所以のものとなるであらう。

(奥田正造—茶味)

一 雀の生活

一 雀と人間

人間のゐる處には必ず雀がゐます。雀のゐる處には必ずまた

人間はゐます。殊に古くから

人間の住ひしてゐる處には、必

ず雀も古びてゐます。

一つの里があれば、その里に

は必ず、人間にも草わけの一人

の祖先があつた如く、雀にも草

わけの雀といふものが必ず一羽あつた筈です。人間の血脈が古



雀 椿 山 筆

草わけ

水入らず

靈的

交渉

カウセフ。

くなればなるほど、雀の血脈も古くなつて、相共にその親しさの度
も深くなるばかりです。でなくて、飽きも飽かれもせぬといふ、隔
てのない水入らずの情愛が、さう續いて行けませうか。今は雀も
人間も意識しないで、無心に眼と眼とを見合はせてゐますが、いざ
となると、何としても離れがたない懐かしさが胸を突きあげて來
ます、雀にも人間にも。

雀ほど人間くさい小鳥はありますまい。無論靈的にです。雀
の生活ほど、また人間の生活に近しいものはありますまい。全く、
雀くらゐ人間と深い交渉を持つた小鳥はありません。それは親
しみ深いといふよりも、雀は人間なしには全く生きてゐられない、
それほど雀は人間離れのしない小鳥なのです。

白壁が輝き、柿の實が赤く鈴なりになつた山裾の農家の景色な
どに、もつともふさはしいものは雀の聲です。さういふ時、午後三

時頃の白い雲が一つ、ふうはりとその上に浮んでゐないことはありません。

その前の畦道を、高い佛龕を背負つた六部衆が通つたり、時とすると、秋晴の放れ駒が嘶きく、駈けて行つたりします。馬子が追つかけて追つかけて慌てくさつて、遠い稻田の向うへと曲つてゆくのも、雀の騒ぎで何といふことなしに平和な田園の風情が温められて、遠くで吼ゆる野良牛の唸りまでが、如何にも長閑な小春のいゝ日を明るくします。

二 雀の沈黙

ある廢園の奥深い林の中、その中は稍うち開けて、其處に腐れた青い古池がありました。その周囲の彼方此方に孟宗藪があり、孟宗藪の内外には、大きな楓がところ／＼に紅葉して、火のやうに燃立つてゐました。香氣の深い晩秋の一夕です。紅葉の蔭には、ま

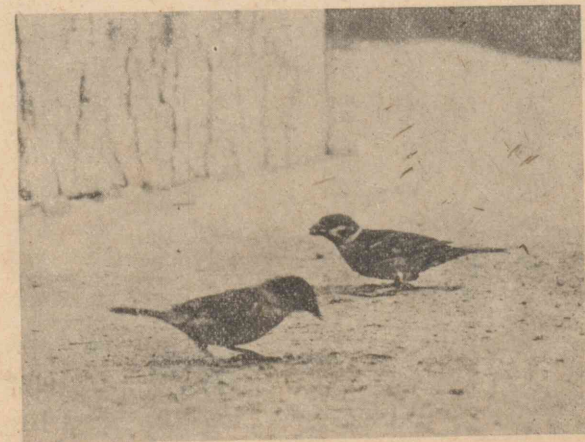
佛龕
ブツガン
六部衆
巡禮者
放れ駒

羅漢柏
アスハヒノキ
配調
寂光土

深々

た暗緑の羅漢柏などが散在して、明るい中に陰鬱な配調を作つて、更に木々の紅葉を一入明るく引立たせてゐました。そこに夕陽が射し込んだのです。金色の寂光土の莊嚴が、紅い楓を中心にして、澄みとほつた秋の大氣の中に深々と現出しました。寂び盡した孟宗の笹葉、暗い常磐木の葉、それらにもあまねく金色の光は細かに降りそゞいで、青い古池の面までも、かう／＼しい古金欄の一片のやうに耀かに染出したものでした。

そのとき、あの紅葉の枝には一羽の雀が留つてゐました。聲もたてません。たゞ幽かに嘴を曲げて、裏羽を掃頭後かいつくろつてゐただけでした。その裏羽が金色に透いて、ちら／＼と日の光をふりこぼすのでした。また向き直つて幽かに圓い頭を動かすと、その頭からまた金色の光がちら／＼とこぼれ／＼するのでした。その時、またとある細かな枯木の枝から、幽かに羽ばたきして、空



雀

を斜め上りに笹藪かけて飛んで行つた雀がありました。何といふ静かな事です。その雀の飛んだ後の空には、一筋の金の光が暫くは斜め上りに曳きはへてみました。と、その飛立つた後の揺れのまだ止まぬ小枝へ、その幽かな揺るゝ光を慕つてか、引違へに飛んで来てまた留つた雀もありました。

ある雀は、笹の葉蔭のその金色の遠近を、幽かに羽音を立てて見え隠れしてゐました。

凡てが、しん／＼としてゐました。その中で、また一番大きな楓のとある太い下の枝の、そのまた下枝の、一番紅い葉の天蓋のかけ

微妙端嚴

三昧境

身入り

神格

諸行無常
宇宙の萬物は皆
うつりかはりて
しばらくも常住
せざる意。諸行
は一切のもの。

には、初めから深く黙つて、たゞぢつと圓い頭を据ゑ、兩眼を据ゑ、膨れるだけ大きく膨れて、身動き一つしない、雀の中でも一番大きな雀が留つてゐました。寂びきつた金燻しの大きな雀、その雀はあまねく金色の光を浴びて、瞬きもせず、身動きもせず、啼かず、飛ばず、たゞ木の上に微妙端嚴の相を具現して、深い沈黙の中に愈、深く沈潜するばかりでした。閑寂の三昧境に味到したその姿。

頭から幽かな圓光が輪のやうに立つてでもゐさうなその姿。私は観ると思はず頭が下りました。さうして思はず掌を合はせました。

雀に神格が無いとは誰が言へませう。雀も大自然の一微分子です、神聖な神の子です。

三 雀の死

萬物は流轉する。永劫に流轉する。諸行は無常のやうではあ

五蘊空に歸す
ゴウゴンクウ

眷屬
ケンゾク
に同じ。
親族

るが、無常であるが故に常に流れてやまぬ光明の波を織り續けて行くのであります。大自然界のもろくの生命は、一に寂靜の中に色々に流轉はするが、何一つ消えも滅びもしないのです。然し乍ら、現世に於て假に人間と生れ、雀と生れ、その他もろくの種々相を現じて生れた者は、現世に於てまた一たびは必ず死する。私の愛する日本の茶色の雀達も、時が來れば息はとまり、その肉は腐れて、五蘊空に歸する。哀れと言ひませうか、不憫とも申しませうか。雀は死にます。然し、雀はその醜い死の姿を誰一人にも見せません。それは不慮の禍で死ぬか、殺されるかでないかぎり、雀の自然死は極めて自然です。さうして清淨です。靜寂です。恭謙な、而して素樸で潔癖な雀は、曾てその巢の中で死體を曝しません。眷屬の前にも腐れてゆく自分の肉のほひを恥づるのです。老衰して、または病み果てて愈、其の壽命の盡きる日が近づいた

と知ると、雀はたゞ獨りその巢を棄て、その家内眷屬同類を棄て、ただ獨り、蒼空の圓天井を次第に見棄てて行方知れずに飛んで行きます。落行く先は日の目もさゝぬ山窪か、陰深い林か、谷底の枯草原か。さういふ淋しい、誰の眼にもつかぬ所へ行つて死んでしまひます。

落葉がその上にふりたまつて來ます。風がはら／＼と吹いて來ます。落葉はまた一しきり降つて來ます。さうしてその雀の上で、落葉は落葉と重なります。さうして時をりかさりと音を立てます。雨が蕭々と降つて來ます。落葉も蕭々と音を立てます。露が置き、果ては野山に白い綿雪さへ降りそゞいで來ます。落葉は腐ります。雀は腐ります。さうして雪がその上に白い柩布をかけてしまひます。何といふ清淨な神祕な死です。雀の死は。

(北原白秋「雀の生活」)

蕭々
風の吹く聲。

柩布

二 鐘 の 音

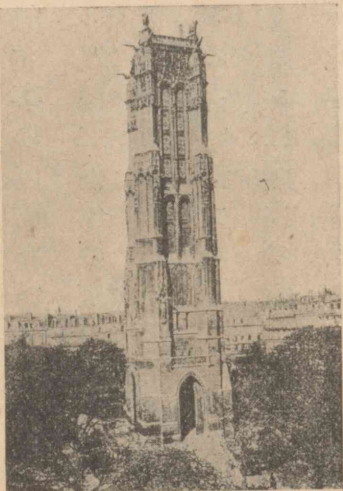
東洋から来た旅人が、ヨーロッパを旅行して、耳の底に最も強い
思出を留めるものは、其の行くさきくの村や町で聴く鐘の音で
ある。何處をどう旅して行つても、鐘の音を聞かないといふ日は
殆ど一日も無い。

先づ旅人がヨーロッパを旅行して、ふと知らない町に入込む。
それが大きい都であらうと、小さい一寸した田舎町であらうと、若
し其の人が、其の町の中心は何處であるかを知らうとしたら、それ
位簡単な事はない。その旅人は、唯頭を擧げて空を仰げばいいの
である。空には必ず其の町の寺院の鐘樓が高く聳えてゐる。旅
人は此の鐘樓を指して、進んで行けばいい。さうすれば、きまつ
て其の鐘樓の隣に、其の町なり村なりの役場があり、それに續いて、

目拔

目拔の官衙だの商店だのが、ずらりと並んでゐる。日本のやうに、
わざ／＼地圖を擴げたり、人に聞いて見なければ分らぬやうな事
は決して無い。

こんな譯で、ヨーロッパを行く人々は、夕暮疲れて宿に歸る時に



寺本のスツラ

も、必ず耳元に寺の鐘の音を聞き、
又その翌朝、夜の安息にすつかり
元氣を恢復して其の町を立出づ
る時にも、やはり朝の鐘の音に送
られながら歩み出すのである。

それが空晴れた日ならば、青葉
の上の白い雲を揺がし、もん／＼とうなりを曳いて、海の白い泡の
やうに頭上にいつばいにひろがつて行くあの莊嚴な鐘の響き、
またそれが寂しい秋雨の日ならば、何か大きな黒い手が、落葉を交

蘇合香
金縷梅科に屬する落葉喬木。

ブルージュ
ベルギー西部の
フラマン地方に
ある都邑。
フラマン地方
フレミッシュ人の
住む地方。ベル
ギーの北部。

へて、色褪せた薔薇や蘇合香や、さうした昨日の美しい花の亡骸を、冷たい屋根々々の上にさあつと投げくして行くやうな、しめやかな鐘の音——、ヨーロッパの旅と、鐘の響とは、其處にどうしても離す事の出来ない約束を持つてゐる。

私は二個年の旅の中で、色々な處で色々な鐘の音を聞いた思出を持つてゐるが、中でも一番強く頭に印象されてゐるのは、ベルギーの古い都ブルージュを訪ねて聞いたカリヨンの音である。カリヨンは、澤山の鐘が響を合はせて一度に鳴出す事である。フラマン地方のカリヨンと云へば、世界的に有名なものであるが、中にもブルージュのお寺のカリヨンなどは、鐘の数が八十もあつて、それが揃つて一度に鳴出すのであるから、大空に海の潮の響を聴くやうな思がするし、また全身に光の驟雨を浴びるやうな思がして、其の壯大崇嚴な感じは何とも云はれない。ブルージュと云へば、

マーテルリンク
ベルギーの詩人。劇作家。(一八六二—)
ヴェルハーレン
ベルギーの詩人。劇作家。(一八五五—一九一六)
ジョルジュ・ローダンバック
ベルギーの詩人。(一八五五—一八九七)
ものうげ

あのマーテルリンク・ヴェルハーレンと並べて、ベルギーの三大詩人と呼ばれるジョルジュ・ローダンバックの故郷である。此の人が、カリヨンの音を、独特な沈鬱な調子でうたつた「田舎で」と云ふ詩がある。

田舎の町のものうげな朝の中で
カリヨンが鳴りわたる
妹のやうな眼で見つめてゐる曉の
やさしさの中で鳴りわたる

カリヨンが鳴りわたる
その青白い音楽が ひらくくと
あたりの屋根々々のうへに
散りこぼれる

破風

黒い破風の段のうへに
風が摘む ぬれた響の
花束のやうに散りこぼれる

塔から落ちてくる朝の音楽よ

それは とほく しをれた

花環となつて散りこぼれる

かくもゆるく かくも冷たく

かくも蒼ざめた花片となつて

落ちこぼれる

さながら 歲月の死んだ額から

散りくるもののやうに

産聲をあげる

殷賑

インシン。

復活祭

キリストの復活

を祝ふ祭。毎年

春分の後に来る

満月の次の第一

日曜に行ふ。

宗教的情熱

ボードレエル

フランスの詩

人。(一八二一—

一八六七)

彼が産聲をあげた場所ではないが、若い日の大半を過したのは、ブルージュの都である。此處は、昔十二世紀から十六世紀までは、頗る殷賑な大商業市であつたが、今では、全く衰へて、死都ブルージュの名に背かない荒れ果てた都になつてゐる。私は、丁度復活祭の頃、此處を訪ねたが、青黒く淀んだ運河が、縦横に古びた町を貫き、其處には灰色の頹れた家々の影が映り、その上を白鳥の群が音なく浮んで過ぎ、また傳説的な小さい池にとりまかれた赤黒い煉瓦建の尼寺が、中世紀の宗教的情熱を偲ばせるやうに立竝んでゐたりして、さながら古い銅版畫を眼前に見る思がした。

とにかくこんな風にヨーロッパの人々の生活と鐘の音とは、いつも親しい関係をもつてゐるだけ、詩人達の作品には、鐘を題材にして作つたすぐれたものが多いやうだ。近代のフランスの詩人の作品に、一寸その例を求めて見ても、ボードレエルには、あの冬の

ヴェルレヌ
フランスの詩
人。(一八四四—
一八九六)
モンス
ベルギーの南部
フランスに近き
ところにある。

夜、火の傍で遠い鐘の音に耳を傾けながら、自分の傷ついた魂をひびの入つた鐘にたとへた「ひび」われたる鐘などの作があるし、ヴェルレヌには、モンスの牢獄の鐵格子から初夏の静かな青空を眺めながら、

空は屋根のかなたに

かくも静かに、かくも青し

樹は屋根のかなたに

青き葉をゆする

うちあふぐ御寺の鐘は

やはらかに鳴る

うち仰ぐ樹の上に

鳥はかなしくうたふ

そして、

あゝ神よ

質樸なる人生はかしこなりけり

と歎じた、あの有名な鐘の歌がある。

一々擧げてゆくと限りがないが、近代の鐘の歌の中で、私が一番好きなのは、ヴィクトル・ユーゴーが、自分がある巨鐘にたとへた詩である。

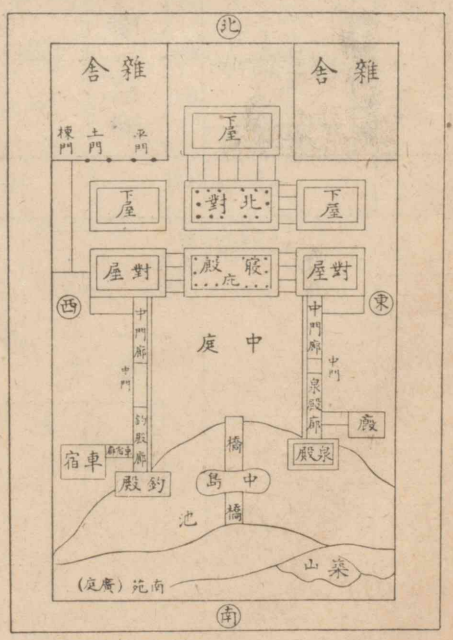
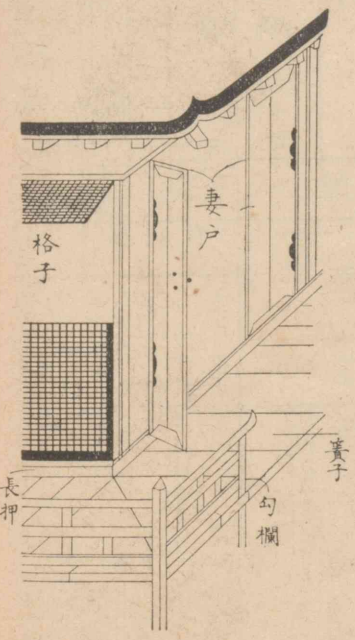
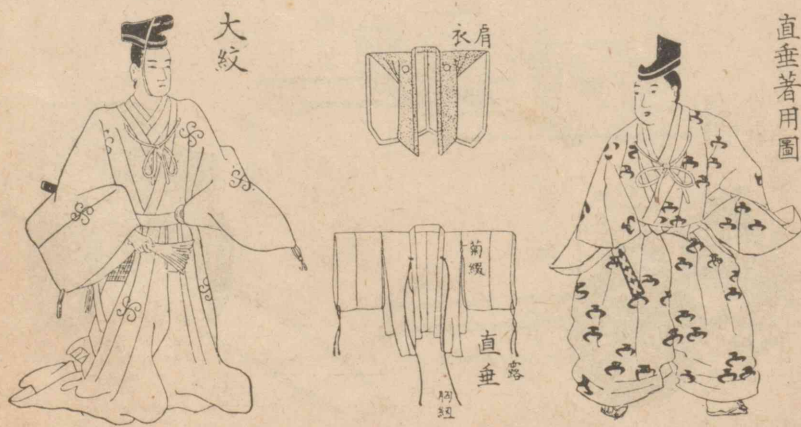
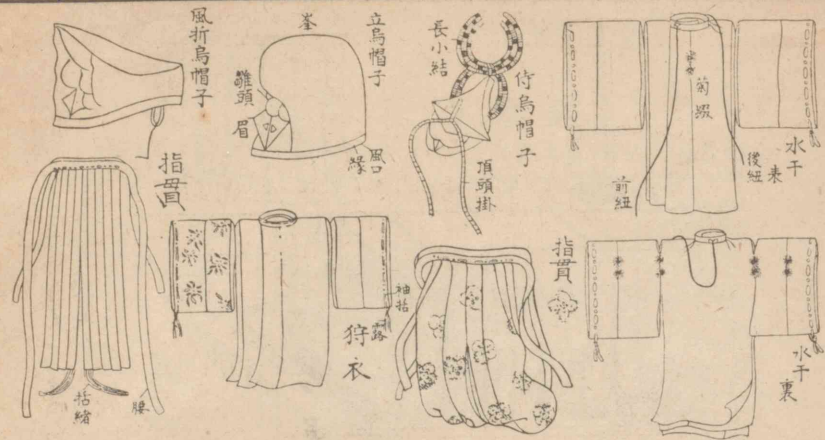
その釣下つてゐる青さびた巨鐘の上には、多くの巡禮者がやつて來ては、銘々無遠慮に、自分の名を書いたり、愚にもつかぬ感想を書附けたりするので、めちやく／＼な樂書で汚されてゐる。

けれども、夕べになつて一度その鐘に撞木が當てられると、その嚴かに太い鐘の音は、山を越え、海を越え、野を越えて、遠く／＼世界の隅々まで響きわたるのである。

(西條八十―丘に想ふ)

撞木
シユモク。

ヴィクトル・ユー
ゴー
フランスの詩
人。小説家。劇
作家。(一八〇二
—一八八五)



文部省檢定濟

高等女學校國語科用 昭和十三年一月二十四日

昭和十二年六月十五日印刷
 昭和十二年六月二十日發行
 昭和十二年十一月卅一日訂正再版印刷
 昭和十三年一月六日訂正再版發行



發行所

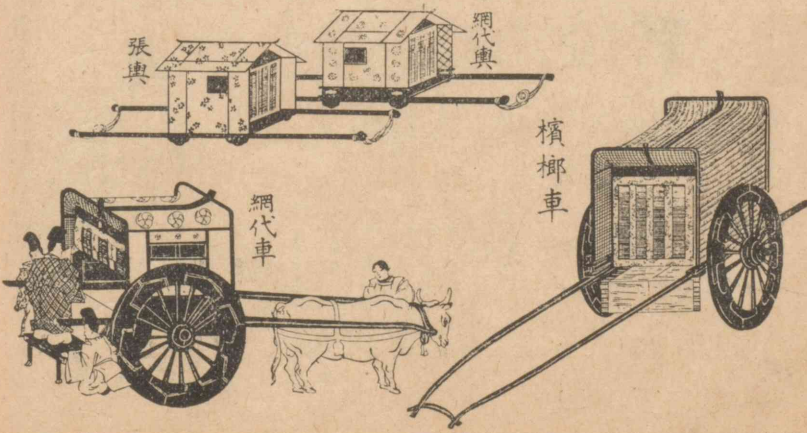
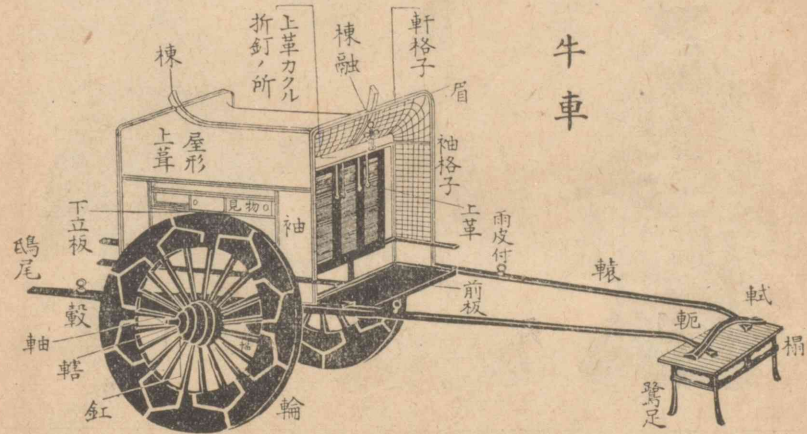
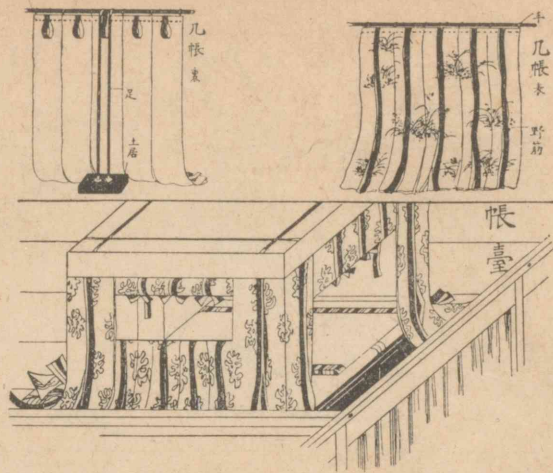
東京市神田區錦町二丁目七番地
 大阪府南區順慶町一丁目五十三番地

湯川弘文社

編者 佐佐木信綱
 編者 武田祐吉
 發行者 湯川松次郎
 印刷者 井下一郎
 東京市神田區錦町二丁目七番地
 大阪府西區阿波座中通二丁目四番地

定價各金六拾錢

最新撰女子國語讀本(全八冊)



四 四 四 四
C B B B
久保田系代子
久保田系代子



四 四

C C

夕 35

久 糸

山 回

香 色

入 色

子 色